

戯曲・二都物語 二幕

チャールズ・ディケンズ

松田 伸子 脚本

原作

【時】

一七七五年から一七九三年

【場所】

ロンドンとパリ

【登場人物 第一幕】一七七五年の年齢

ルーシー・マネット 十七歳

プロス 三十代

ジャービス・ローリー 六十一歳

アレクサンドル・マネット 四十五歳

チャールズ・ダーネイ 二十歳

シドニー・カートン 二十代後半

ストライバー 二十代後半

ジョン・バーサッド 二十五歳

エルネスト・ドファルジュ 三十歳

テレーズ・ドファルジュ 三十代

エヴレモンド侯爵 四十代

ガスパール 三十代

ヴァンジヤーンス

オールドベイリーの裁判長（声）

同・法務総裁

ロイヤル・ジョージホテルの給仕

ドナルジュ酒店の客A

同・B

オールドベイリーの傍聴人A

同・B

同・C

花売り

侍従

サンタントワーヌの人々

市民達

【第二幕】 一七九二年の年齢

ルーシー・マネット 三十四歳

プロス

四十代

ジヤービス・ローリー 七十八歳

アレクサンドル・マネット 六十二歳

チャールズ・ダーネイ 三十七歳

ルル 九歳

シドニー・カートン 三十代後半

ジョン・バーサッド（実はソロモン・プロス） 四十歳

エルネスト・ドフルジユ 五十五歳

テレーズ・ドフルジユ 五十年代

薪屋

ヴァンジヤーンス

回想・エヴレモンド・兄 二十六歳

回想・エヴレモンド・弟 二十六歳

回想・シモーヌ 二十歳

回想・ジヤン 十七歳

コンシェルジュリーの一回目の裁判長（声）

同・検事（声）

コンシェルジュリーの傍聴人A（声）

同・B（声）

同・C（声）

男A

男B

男C

コンシエルジュリーの一回目の裁判長（声）

同・検事（声）

パリのゲートの男（声）

処刑人（声）

市民達

パリの市民達

ラ・カルマニヨールの人々

【舞台装置について】

専門家の裁量に委ねるが、スピーディに場面を展開することを望む。

此処では便宜上、ト書に「上手」「下手」「高い所」などの表現にとどめているが、高低差のある立体的な装置が望ましい。

【配役について】

チャールズとシドニーを一人二役を想定し、録音などで声を予め収録しておく事とする。

【衣装について】

革命時のフランスの市民は、一様に赤い粗い布製の帽子を被っている。

第一幕第一場

一七七五年十一月二十五日。

ドーヴァーにあるロイヤル・ジョージ・ホテルの一室。椅子とテーブルがある。

給仕の案内で、プロスとルーシー、入つて来る。

プロスは赤毛で赤いボンネットに赤いドレス。ルーシーは十七歳になる可憐な娘。

給仕 このお部屋でございます。

プロス (給仕にチップを渡す) 有難う。

ルーシー 風が強いのね。波の音がするわ。

給仕 (ルーシーに見惚れる) ……ええ、左様でござい

ます、お嬢様。このドーヴァー海峡は、お天気が目まぐるしく変わります。良く晴れるとフランスの島影が見えますよ。よろしければ、後ほど、崖にご案内いたしましようか。

プロス (プロスが視線を遮る) いいえ、結構。物見遊山

できたわけじやないんですから。それより、テルソン

銀行のジャービス・ローリー様と、ここで待ち合わせをしています。ローリー様が来たら、ルーシー・マネツト様が到着したことをお伝えして。

給仕　　（ルーシーを見られる位置に動く）畏りました。ローリー様は昨夜遅くに、お着きになりました。すぐにお伝えいたしましょう。

プロス　（再び視線を遮るように立つ）ええ。今すぐに。

給仕、お辞儀をして出て行く。

プロス　……チップ、あれで良かつたかしら。

ルーシー　（見渡して）とても立派なホテル。プロスさん、

大丈夫なの？　こここの払いは。

プロス　そんなこと。お嬢様が心配しなくてよろしいんですよ。呼び出したのはテルソン銀行の方なんですから。あの馬車だつてテルソン銀行からの差し回しですかね。ロンドンから、ほとんど一日、馬車に揺られて……まだ揺られているみたい。おまけにあの忌々しい

泥濘道——。

ルーシー (笑つて) プロスさんたら、「私が馬を引きまし
ょう」って言うんだもの。御者が驚いていたわ。

プロス あんなに急な坂。途中で止つたら車の重みで馬が
引きずられてしまう。

ルーシー そうね、プロスさんのコートを轍に敷いて泥濘を
抜け出せたんですもの。寒かつたでしょうに。

プロス 私は大丈夫です。兎にも角にも何故、テルソン銀
行がドーザーにお嬢様を呼んだのか知りたくて。し
かもお父上の事だなんて。

ルーシー プロスさんは、ジャービス・ローリーと言う方に
会つたことはあるの?

プロス いえいえ。お嬢様の後見人がテルソン銀行で、そ
の担当がローリー様だと言う事しか存じません。毎月、
生活に必要なお金を、渡して下さつてます。私
のお手当もテルソン銀行から。でも、私が銀行で会う
のは下つ端のイギリス人……ローリー様は、重役です
から。多分……。

ノックの音。

給仕 (声のみ) 失礼いたします。ジャービス・ローリー様でございます。

プロス はい。お嬢様はここにいらして。(扉の外に) た
だいま。

プロス、扉を少し開けて、客人を見てすぐ閉める。

プロス (戻つて来て) お嬢様……あの……。

ルーシー どうかして?

プロス あの……イギリス人の格好をしたユダヤの方が。

ルーシー ユダヤの方? どうぞ、お通しして。

プロス ……畏りました。

プロス、扉を開ける。

プロス (険しい顔付き) どうぞ、中へ。

鬘を付けて正装のローリーが来る。

ローリー ルーシー・マネット様。遠路はるばる、お呼び立ていたしまして、たいへん恐縮でございます。（正式なお辞儀）。テルソン銀行のジャービス・ローリーでございます。

ルーシー（ローリーの手を取つてコーテシー）初めてお目にかかります。（ローリーをじつと見て）あの……以前、お目に掛かつたことがありますでしようか？

ローリー 覚えておられるかどうか。昔、お小さい時に。ルーシー 昨日……お遣いの方から、私の父の件で内密のお話があると……。ですが、父は私が生まれる前に亡くなつております。

ローリー お嬢様。その件について、是非、二人でお話し出来れば（プロスを見る）。

プロス（断固として）いいえ。私はここにあります。

ルーシー 大丈夫よ、プロスさん。

プロス とんでもない。うら若きご婦人と男性を一人きり

にすることはできません。私にはお嬢様をお守りする義務がござります。

ローリー ……よろしいでしよう。貴女の義務を果たして下さい。

ルーシー どうぞ、お座りになつて。

ルーシーとローリーが座る。プロスは立つたまま、じつとローリーをねめつけている。

ローリー 最初に申し上げておかなければならぬのですが、私は銀行の職務を遂行するだけの人間です。そこに情を挟む余地はありません。実務家としてお話を申し上げます。私がテルソン銀行のパリ支店におりました頃——二十年も前の事になりますが——私の担当する顧客の中に、将来有望なお医者様がいました。その方はボーヴェの出身でした。

ルーシー ボーヴェ？ フランスの？ ……医者？

ローリー 左様です。その方はイギリスのご婦人と結婚な

さつてパリで開業していました。有能で穏やかな人柄でした。フランスの上流の家庭がそうなさるように、その方も……まだ若かつたので沢山とは言えませんが……財産をテルソン銀行に任せていきました。

ルーシー お待ちになつて。そのお医者様は、イギリスのご婦人と結婚したと……？

ローリー はい。

ルーシー 私の母はイギリス人でした。父は確かボーヴェの出身。私はパリで生まれたのです。

ローリー 存じております。お嬢様、ここからが重要な事なのです。

ルーシー もしや、それは私の父の……？ そうなのですね？ お顔を見たこともない。父が亡くなつて、私が生まれ、そして間もなく母も亡くなりました。ああ、貴方は、お父様を知つていらつしやるんですね！

ローリー どうぞ、落ち着いて下さい。そうです。仰る通り、私は貴嬢のお父上、アレクサンドル・マネットの話をしているのです。ですが、どうか……ここからが、

難しいのです。私とお父上は、単なる銀行家と顧客の関係、あくまで仕事上の付き合いでした。友情があつたわけではありません。ですが、信頼はありました。私は実務家ですから、今日ここにお呼びしたのも、決してお父上の思い出話をする為ではありません。よろしいですかな。

ルーシー ……どうぞ、お続け下さい。

ローリー その当時のフランスは……今もそうですが……とても悪い状態だったのです。何の罪もない人を闇に消し去ってしまう。都合が悪ければ、どこかに閉じ込めたり、命を奪つたりすることが容易くできる。もしも——もしも、お父上が生きていたとしたら——。

ルーシー でも。父は亡くなりました。

ローリー 私はお父上には敵がいたのだと思います。権力を持つた恐ろしい敵が。母上はそれを恐れられた。父上を救うあらゆる請求、あらゆる嘆願をしても叶えられなかつたのです。ご自分の死の間際、その敵の力がお嬢様に及ばぬように、何も知らせず、幸せになるよ

うに願つて、お父上を亡くなつた事になさつた。

ルーシー なんと仰るの……では。お父様は生きている！
生きていらつしやる！

ローリー テルソン銀行は顧客に責任を持ちます。長い間、
秘密裡にアレクサンドル・マネットの行方を捜してい
ました。そしてこの度、ある情報を掴みました。極秘
情報です。十八年に亘り、幽閉されていた男性を保護
したのです。その方はお父上の特徴と合致します。け
れど、まだ確認されたわけではありません。

ルーシー ……ああ。私は、何も知らずにいた。

ローリー よろしいですか。これは決して他言してはなり
ません。テルソン銀行も一切、この件の書類を持ちま
せん。ただ「人生に蘇る」と言う言葉が合言葉。

ルーシー 今、何処に？

ローリー パリです。昔の使用人の家に匿われています。

ルーシー 会えるのですか？

ローリー 明日の定期船でフランスに渡ります。

ルーシー 私も一緒に！

プロス いけません！ それは、いけません！

ルーシー だつて、お父様が生きているのよ！

ローリー 先ほども申し上げたように、仮にお父上だとしても、身分を証明するものはありません。けれど、お内の方が一緒なら、迅速にイギリスに戻れます。もし本当にお父上だとしたら、一刻も早く、安全なイギリスにお連れした方がいい。

プロス では、私も一緒に。

ローリー いいえ、目立たない方がいい。人数は最小限。これは極秘の任務なのです。

プロス 赤毛の私が一緒では目立つと？ では、貴方。身分を証明する物をお持ちですね？ 見せてください。

ルーシー プロスさん、この方は……。

プロス お嬢様に、ご両親がない事を知つての、拐しかもしれません！

ローリー 拐かしですと！

プロス 考えてみれば、出来すぎた話じやありませんか。

十の時から大切にお育てしたお嬢様ですよ。私の命に

代えてもお守りいたします！

ローリー (プロス迫られて髪を落とす) いやいやいや！

ルーシー 待つて！ プロスさん。この方なの！ 孤児になつた私をイギリスまで連れて来てくれたのは。そうですね？ 貴方ですよね？ お顔に見覚えがありますわ、ジャービス・ローリー様。私は二歳でした。あの時、遠ざかるフランスの島影を、貴方に抱かれて見ていた……。

ローリー そ、そうです。私が貴嬢をお連れしたのです。あ！ 私の髪！ (慌てて拾つて被る) ……けれど、それ以後、一度も貴嬢をお尋ねしなかつた。お分かりですね。私は実務家で情を挟まず、ただ任務を果たしただけなのです。…… (プロスに) 貴女もそうでしょうけれどね。

第一幕第二場

パリ、サンタントワーヌ。ドフルジユの酒場。

屋根裏に続く階段がある。カウンター、テーブル

席があり、奥まつた席にルーシーとローリーが身を潜めるように座っている。身なりの貧しい男たちが三人、ちびちびとワインを舐めている。カウンターの中にはテレーズ・ドファルジユ。せつせと編み物をしている。瘦せていて鋭い眼差し。店の外からエルネスト・ドファルジユが入つて来る。

ドファルジユ　　よう。なんだ、なんだ、湿気た面して。

客A　　今年も小麦が不作だとよう。雨ばっかり続いたから。

ドファルジユ　　サンタントワーヌと言えば、フランス中に知れ渡った家具職人の街。それが……。

客A　　こちとら、端から仕事もねえよ。

客B　　近頃じや、道端で死んだ犬の肉でワインナーを作るんだとよ。猫なんかもうとつくに喰われちまつてどこにも居やしねえ。

テレーズ　お前さん（顎で上手奥を差す）。あんたにお客だよ。お嬢さんの、あの格好じや、目立つちまう。早く屋根裏部屋に。

テレーズが頷くと、客AとBはふらりと席を立て、外の様子を見、安全を知らせる為に頷き返す。そのまま、何気ない振りを装つて、見張りに立つ。

ローリー、ドファルジユに近づく。

ローリー 　ここにちは。ドファルジユさんですね。

ドファルジユ 　やあ。

ローリー 　……（そつと）人生に蘇る……。

ドファルジユ 　（頷く）そうとも。十八年も。

ローリー 　あちらがお嬢さんです。

ルーシー 　（駆け寄り）父を助けて下さって、有り難うございます。

ドファルジユ 　礼を言うのは早い。まだはつきりと決まつたわけじやない。なあ、これにはちよつとばかし理由があるんだ。どうか、驚かないでくれ。見れば分かるが……ドクトル・マネットは自分の名前が思い出せない。十八年もバスチーユ監獄に閉じ込められて、酷い仕打ちを受けてきた。

ルーシー ええっ！ 監獄に……！

ドファルジユ そうだ。良く分かつてないんだ。

ローリー 良く分かつていない、とは？

ドファルジユ 言葉の通りだ。だから、解放されたんだと思う。とにかく、一緒に来てくれ。それから、大きい声は出さないで。

高い場所にスポットが当たる。やせ細ったマネット。トントンと木槌の音。ドファルジユを先頭に、階段を上る三人。

ドファルジユ いいかい？ 開けるよ。静かに頼むよ。（鍵を回す音）……ここにちは。入りますよ。

ローリー （ルーシーに）貴嬢はここでお待ちなさい。まづ、私が様子を見て来ます。

ドファルジユ ……暗いな……窓を開けますよ。

光が差し込む。マネットは靴作りに没頭している。

ドファルジユ 精が出ますね。ご気分はいかがですか？

マネット ……（手を休めない）。

ローリー （ドファルジユに）何をしているんです？

ドファルジユ 本人に聞いてごらんなさい。……お客様をお連れしたんですよ。

ローリー ここにちは。何を作つていらっしゃるんです？

マネット （怯えて）……誰だ？ なんと言つた？

ローリー 何を作つてているのか、お尋ねしたんです。

マネット （差し出す）ご婦人用の靴だ。散歩の時に履く…

…。

ローリー ほお！ 素晴らしい靴ですね。これはどなたが作つたんですか？

マネット ……。

ドファルジユ 作つた人の名前を教えてあげて下さい。

マネット ……北の塔。百五番（また木槌を振るい始める）。

ローリー （ドファルジユに）北の塔とは。

ドファルジユ （小声で）バスチーユの北の塔、百五番。閉

じ込められていた部屋の事でしょう。

ローリー ところで、貴方の本当の職業は、靴を作ることではありませんね？

マネット ……ああ。違う。しかし独学で学ぶ事を許された。だから靴作りをしている。さあ、返してくれ。仕上げなければ。

ローリー （靴を渡しながら）私を覚えていませんか？

私は貴方の財産を管理していた銀行家です。（ドファルジユの腕を取り）この方は？ 貢、お宅で働いていた人です。どうです？ アレクサンドル・マネット。

マネット、名を呼ばれて靴を落とす。交互にローリーとドファルジユを見る。一瞬、ぱあっと明るくなるが、やがて力なく床に目を落とす。

ドファルジユ どうです？ 彼でしよう？

ローリー 酷く人相が変つてしまつた。

ドファルジユ イギリスに連れて行きますか？

ローリー 万が一、人違ひなら……いや、彼に違ひないと

思うが。どうしたものか。

ルーシー、マネットの前に進み出る。

ルーシー　……お父様。お勞しいお父様。

マネット、ルーシーを凝視する。みるみる驚きの表情。

マネット　……マリー！　何故ここに、お前が。いいや、
これは幻に違いない。私は閉じ込められたのだ……長
い間……すっかり古いきばらえたこの体。なのにマリ
ー、お前はあの時のまま。ああ、また幻なのだ。捕ら
えられてから、幻は幾度も私の元に訪れた。せめてお
腹の子が、無事に生まれたのか教えておくれ。

ルーシー　そう。私の母の名はマリー。お腹の子は無事に
生まれました。その子は女の子で、今年、十七になりました。貴方のお名前を教えて下さい……。

マネット アレクサンドル・マネットだ。職業は医者。娘、娘と言つたのか。ああ、マリー。たつた一人で子供を産んだんだ。どんなに心細かつただろうか。今、マリーはどこに？

ルーシー、マネットに身を投げかける。

ルーシー ああ、お父様……お父様！ お話したいことが

山程あります。けれど、早く、このフランスを出なければ。私を信じて下さい。どうか私と一緒にイギリスに来て下さい。そこは安全で温かく、明るい場所です。

マネット それで、娘の名前は？ 名前はなんと？

ルーシー ルーシー。ルーシー・マネットです。

マネット ルーシー……「光」だ。

ルーシー ええ。そうです。ああ、お父様。どうぞ、何も知らずにいた私をお赦し下さい。そして、私を祝福してください。（振り返り）お二人、父を連れてすぐ出られますか？

ドナルジユ　書類はすぐに出来る。通行証も仲間が手配してくれる。まず馬車の手配だ。移動は日が暮れてからの方がいい。それまでに準備を整えよう。

第一幕第三場

ロンドン、ソーホー。マネットの家の居間。

プロスが、クリスマス・ツリー（と言つても、枯れた枝に小さな林檎とベルが付いている）に、更に林檎を括りつけている。

プロス　　出来た。クリスマス・ツリー！　（振る）それで、カトリックの国の人は、これを何に使うつて言つたかしら？　あら？　あのフランス人のシェフ、なんて言つたかしら？（フェンシングの構え）　フランスでは、これを……あら？（ハツと思いつき、大きく天に向かい振り回す）神様！　神様！　此処です！

此処にいます！　どうぞ、お嬢様をお守りください。

扉が開いて、ルーシーが飛び込んでくる。

ルーシー プロスさん！ ただいま！

プロス お嬢様！ (ツリーを振る) 神様、早速有り難うございます。

ルーシー、プロスに抱き着く。

ルーシー ああ！ お父様だつたの！ 本当にお父様だつたの！

プロス (滅茶苦茶に振り) なんて素晴らしいご利益！

チャールズ・ダーネイがマネットを背負つてやって来る。チャールズは気品のある美しい青年。続いて、ローリー、マネットが使つていた靴作りの道具やベンチを持つてふらふらしながらやって来る。

ローリー (ひじ掛け椅子に座り込み) ああ！ 着きましたぞ！

ルーシー チャールズ、お父様をここへ。

チャールズ、長椅子にマネットをそつと寝かせる。

ルーシー、ブランケットをマネットに掛ける。

チャールズ 眠つていらつしやる。

ルーシー お父様、着きましたよ。ここがこれからお父様と一緒に暮らす家です。

プロス (咳払い) ……チャールズ？

ルーシー プロスさん、こちらはチャールズ・ダーネイ様。

船でお会いしたの。お父様にとても良くして下さったのよ。

ローリー 船が揺れて揺れて。船酔いで私は何もできなかつた。彼が居てくれて、どんなに助かったか。

プロス (ローリーを一瞥) まあ、実務家なのに船酔いを？

チャールズ お父様をよく休ませてあげて下さい。

プロス 今、皆さまに温かいお茶を。お父上にはスープをお持ちしようか。軽いお食事ならすぐできますわ。

チャールズ 馬車を待たせているので、僕はこれで。

ルーシー 本当に有り難うございます。せめて馬車までお送りします。

チャールズ ありがとうございます、マドモアゼル。でも、お父様の傍に居てあげて。

チャールズ、出て行く。ルーシー、後を追う。

プロス マドモアゼル？

ローリー 彼はフランス人です。とても良い青年だ。

プロス で？ 貴方は？ ご家族が首を長くして待つていらっしゃるんじやありませんか？

ローリー なんの。私は独り身です。ずーっとね。

プロス (興味なく) はーん。

ローリー ですから軽いお食事に喜んで呼ばれますよ。船酔いでろくに食べていないです。なんでしたら重い

お食事でも大歓迎。

プロス ……貴方のお口に合えばよろしいですけれどね。
どうぞ、食堂へ。

明かり消える。

第一幕第四場

五年後の一七八〇年。明るい夏の夕暮れ。

プロス、長椅子の周りを整えている。

ドアノックカーが鳴つて、ローリーがやつて来る。

プロス おや、ローリー様。

ローリー ここにちは、プロスさん。勝手に失礼しますよ。

マネット先生は？

プロス 今、お嬢様とお散歩に。じき戻るでしょう。

ローリー マネット先生は相変わらず忙しいのですか？

プロス （鼻を鳴らして）忙しいのは、私もです。先生

が医者として開業なさつて、私までお薬を届けに行つたり、病人の様子を見に行つたり、それはもう、毎日

目が回る忙しさ。でも、ご存じの通り、先生は貧しい方からはお金を取らないのです。まあ、『貧乏暇なし』の生きる見本と言つた所ですわ。

ローリー ……以前のように塞ぎ込むようなことは？

プロス 急にぼんやりすることですか？ ええ。最近はありません。以前は心配しましたけれど。こちらに来て、もう五年……最近は患者さんが大勢来るので、塞ぎ込む暇ないのでしょう。私はいいことだと思いますよ。何か、気になることでも？

ローリー 実は、テルソン銀行に知らせがあつて、ルーシーに証人として出廷してもらいたいと。

プロス 証人？

ローリー 裁判の証人です。

プロス 裁判？ 何の裁判ですか？

ローリー 覚えてますか？ チャールズ・ダーネイを。

プロス チャールズ……はいはい。あのフランスの方がどうしたんです？

ローリー チャールズは現在、イギリスを本拠地にして、翻

訳の仕事をしているのですが、この度、彼が訴えられたのです。

プロス チャールズ様が？ 一体、何の罪ですか？

ローリー 国家の機密を漏らした反逆罪です。

プロス 反逆罪ですって！？

第一幕第五場

オールド・ベイリーの中央刑事裁判所。

奥の見えない所に裁判官席。その横に被告人席。証言台が中ほどにある。上手に弁護士クライバー。法衣を纏い、鬘をつけて威風堂々としている。上手の中央よりの証人席に、ローリー、マネット、ルーシー（娘時代の髪を下ろしたスタイルからアップになっている）。下手に法務総裁とその証人のジョン・バーサツド。紳士の身なり。傍聴人が騒めている声がする。

裁判長

（声。木槌を叩く）被告人チャールズ・ダーネイ、

入廷せよ。

チャールズ、入廷して、被告人席に立つ。

裁判長（声）　　被告人は被告人席に着席せよ。

傍聴人A（声）　　いよつ！　色男！　死刑！

法務総裁　皆さん、この男、チャールズ・ダーネイは、我が

国王の領土であるアメリカ植民地において、我が陸軍
及び海兵隊の機密情報を漏らした憎むべき悪党です。

被告は少なくとも五年以上前から、イギリスとフランス
を頻繁に行き来していました。一七七五年、植民地
マサチューセッツ・コンコードにおける民兵部隊の武器庫を接收とせんとする作戦を、事前にフランス側に
流したのです。その為、植民地民兵の抵抗により、わ
が軍は甚大な被害を受けました。ここに勇気ある愛国者、ジョン・バーサッド氏を証人として尋問します。

裁判長（声）　　ジョン・バーサッド、前に。

バーサッド　（証言台に進み出る）　はい。

法務総裁

貴方の提示した証拠は、（書類の束）これです

ね。わが軍の配備のリストです。証人は被告との友情と愛国心の板挟みになりながら、被告の部屋からこのリストを見つけ出し、愛国者の務めを果たしたのです。さらに過去に遡り、被告が同じような書類を受け取つた事を目撃しています。証人、それはいつ、どこで、ですか？

バーサツド 五年前の十一月、チャタムのカフェです。

ストライバー （立ち上がり）異議あり！ コンコードの

戦いは一七七五年の四月です。十一月では時期的におかしい。

法務総裁 それを含めてだ。この証拠は、すべての情報漏洩の最初の手がかりだ。

裁判長 （声）異議を却下します。

ストライバー では、こちら側から尋問します。バーサツドさん、生計は何で立ててらっしゃいますか？

バーサツド 私は、ジエントルマンです。働いてはいません。資産があります。

ストライバー 資産とはどんなものでしよう？

バーサツド ここで話す必要がありますか？ まあ、簡単に言えば、遺産です。遺産を相続したんです。

ストライバー 誰の遺産ですか？

バーサツド 親戚です。遠い親戚。

ストライバー 被告とは友人ですか？

バーサツド はい。

ストライバー 被告人、答えて下さい。貴方はバーサツド

さんの友人ですか？ どうやつて彼と知り合いに？

チャールズ 友人ではありません。私の行く先々で、よく会うのです。例えば、公園や劇場で。それで彼が話しかけてきて、知り合いになりました。

ストライバー バーサツドさん、貴方は百ポンド、被告に借金がありますね？

バーサツド それだけ親しいと言う事です。

ストライバー 借金は返しましたか？

バーサツド ……どうだつたかな？

ストライバー 返していません。それに貴方は債務者監獄

に入つたことがありますね？

バー サツド ……。

ストライバー どうなんですか？ 貴方は、日常的にサイコロ賭博をしますね。何回、監獄へ？

バー サツド ……まあ、一、二度は。賭け事は嗜み程度です。誰だつてやるでしょう？

ストライバー 一、二度？ 記録には八回とあります。いかさまは？

バー サツド してない！

ストライバー 昨年、九月、いかさまをして、階段から蹴り落されましたよね？

バー サツド あれば、誤解だ。

ストライバー 尋問を終わります。次に弁護側の証人の尋問を行います。ルーシー・マッネットさんを。

裁判長 (声) ルーシー・マッネット。

ルーシー (緊張して進み出る) はい。

ストライバー 被告人を見たことがありますか？

ルーシー (チャールズを見つめ) はい。

ストライバー いつ、彼と知り合いましたか？

ルーシー 五年前の、一七七五年の十一月の初めです。フランスのカレーの港から船に乗りました。父の具合が悪く、連れは船酔いで、乗り合わせたチャールズ様が父を介抱して下さったのです。

裁判長 （声）ミス マネット。『被告』と呼ぶように。

ストライバー それ以降は？

ルーシー 二年ほど前に、うちを訪ねて下さいました。

ストライバー カレーの港で、被告は誰かと一緒にしたか？

ルーシー 船が出たのは真夜中で、私は父にかかり切りで、その……被告の事までは見ておりませんでした。

ストライバー 被告とどんな話を？

ルーシー アメリカでの戦争がどのようにして起こったのか……分かりやすく説明して下さいました。

法務総裁 裁判長。具体的な内容を証言させて下さい。

裁判長 （声）認めます。証人は被告との内容を具体的に。

ルーシー 確か……イギリスがアメリカのお砂糖や印刷

物に税金を掛けたのがきっかけになつたとか、イギリス議会にアメリカの代表がいなかつた事とか：…それから、ジョージ・ワシントンは歴史に名を残すだろうとか。いろいろですわ。けれど、政治的な話ではありません。たわいもないお喋りですわ。

法務総裁　　たわいもない？　ジョージ・ワシントンがたわいもない？　聞き捨てなりませんな。

ストライバー　マネットさん、率直にお答え頂いてありがとう。証人尋問を終わります。

ストライバー、ルーシーを席にエスコート。

ストライバー　裁判長、再び、バーサッド氏に尋問します。

裁判長　　（声） ジョン・バーサッド。

バーサッド　（再び証言台に立つ） はい。

ストライバー　ところで。この書類にある事はみな真実です。確認しました。また当時、このリストは極秘でした。

私の助手が、実に興味深い事を突き止めました。なん

と、その書類はバーサツドさんが書いた物なのです。

バーサツド はあ？ 何を言い出すんだ。そんなのは嘘だ！

ストライバー ではここで、今一度、『陸軍及び海兵隊 マサチューセッツ武器庫接收作戦』と書いて下さい。三回ほど繰り返して書いて。被告にも書かせて下さい。

裁判長 （声）許可します。被告と証人に紙とペンを。

バーサツド、震える手を隠して文字を書く。チャールズ、ルーシーと視線が合い、嬉しそう笑う。無造作にさらさらと書く。官吏が二人チャールズの前に立つ。チャールズ、着席（薄暗く顔は見えない）。官吏、それぞれの紙を取り上げて、裁判長に差し出す。

ストライバー 法務総長、書類のゴー確認を。筆跡はどうですか？

法務総長 （憤然と）被告の文字に似ているようだ。

ストライバー 結構。それでは証拠の書類を見て下さい。

マサチュー セツツの綴りですが。……マサチューの後、セツツは？ 繰りはS、E、T、その次は？

法務総長 （驚き） S……になつてゐる。

裁判長 （声） 証人はS。被告はTと書いている。

ストライバー 法務総長、ご確認を。その書類のマサチュー セツツは、すべてTが抜けていますね。

法務総長 （紙を繰る）……確かに。

ストライバー 正確にはセツツはSET、TSだ。証人は三回ともTを抜かしている。筆跡は真似ることが出来る。だが、間違つて覚えた綴りは？ バーサツドさん、貴方がフランスからリストを手に入れ、筆跡を真似て、それを書いた。そうですね？

裁判長 （声） なんと。

バーサツド 「T」を抜かしたからと言つて、それが何の証拠になるんだ？

ストライバー 少なくとも被告は、正確な綴りです。従つて、そのリストは被告が書いた物ではない。さて、チャタムにはご存じの通り、海軍工廠があります。バーサツ

ドさん、貴方は一七七五年の十一月二十四日金曜日の夜、被告がカフェに居るのを見たと証言しましたね。

バーサツド　　ああ、そうだとも。被告が男と会っていた。

ストライバー　被告に間違いありませんか？

バーサツド　　友人を見間違えたりしない。

ストライバー　では、友人にそつくりな人を見たことはありますか？

バーサツド　　ない！

ストライバー　もう一度、聞きます。貴方が見たのは被告に間違いありませんか？

バーサツド　　だから！　間違いない！

法衣を来た鬱のシドニー、上手側から進み出る。

ストライバー　　ではここで、私の助手を紹介しましょう。

シドニー・カートンです。

シドニー、鬱を取る。チャールズと瓜二つ。

傍聴人B (声) あれを見ろ！ 同じ顔だ！

傍聴人C (声) 双子か？

バーサツド ……え！

ストライバー 貴方が見たのは私の助手だったのでは？

被告はその日、フランスに居たことが証明できます。

バーサツド そ、そんな……そんなはずはない！

ストライバー 金を貰つて、無実の彼に罪を着せたな。お前こそ、フランスのスパイだ。愛国者の皮を被つたこの

忌まわしいユダめ！

ローリー (ハツと顔を上げる) ……！

どんどん、どよめきが大きくなる。

暗転

第一幕第六場

ソーホーの家の居間。裁判のあと。

マネットが長椅子に座り、隣でルーシーがお茶を淹れている。

プロス、エプロンをし、肩にタオルを肩に掛け（料

理の途中)、手には肉叩きを持つてゐる。

プロス それで、そのバーとナントカはどうなつたんです?

ルーシー 勿論、牢屋行きよ。

プロス とんでもない奴だわ。

マネット ルーシーが實に堂々と証言したんだよ。私には、それがとても誇らしかつた。

プロス さすが、お嬢様ですわ。

ドアノッカーの音。

ルーシー 私が出るわ。

プロス いけない、いけない、付け合わせを茹でなくては。

プロス、台所へ。

ルーシー、玄関へ行き、ローリーを招き入れる。

ルーシー ローリー様、ようこそ。

ローリー 今日は大活躍でしたね。祝勝会にお招き頂き有難う。（入つて来る）おや、私が一番乗りですか？

ルーシー ええ。他の方達はまだ。

ローリー と、言うと、チャールズの他に、まだ誰か来るのですか？ あの弁護士は断つたのでは？

マネット 弁護士の助手を呼んだんだ。

ローリー 助手？ あの？ あの助手は、亡くなつたジャステイン・カートン判事の一人息子だそうですよ。父親は、みんなから尊敬されたのに。あの飲んだくれのバカ息子は、未だに弁護士の助手、使いつ走り。

マネット しかし、彼のお陰だから。

ローリー ただ、突つ立つてただけですよ。

ルーシー （うずうずして）まあ、ローリー様。プロスさんは、何も言つていませんの。黙つていて下さいな。

ドアノッカーの音。

ルーシー　（小声で）よろしいですわね？　はい、ただいま。

扉を開けると、チャールズがいる。

ルーシー　（一瞬、どちらか分からない）……ようこそ。

チャールズ　ルーシーさん。今日は僕の為に、証言をしていただき、本当にありがとうございました。

ルーシー　チャールズ様！　さあ、お入りになつて。

チャールズ　ローリーさん、マネット先生。今日は有難うございました。

ローリー　おお、チャールズ。お祝い出来て何よりです。

ルーシー　本当に。お役に立てたのなら、嬉しいですわ。

チャールズ　勿論です。とても有難かったです。こうしてお祝いまでして頂いて。

マネット　チャールズ、ロンドンの歴史を端的に書いた本があるんだが、興味はあるかな？　お客様が揃うまで、書斎において。

チャールズ ありますとも。是非。

チャールズとマネット、奥に行く。

ローリー ルーシー、悪だくみに輝く貴嬢の瞳は、まるで猫のようですよ。

ルーシー 今日は、とても良い日ですもの。

ローリー それはそうです。正義が勝ち、悪は負けられた。

世の中の常として、その逆が多いと言うのに。

ドアノックカーの音。

ルーシー いらしたわ！（台所へ向かい）プロスさん、お願いできる？ 今、手が離せないの。さ、ローリーさんはこっちへ（奥へと）。

ローリー 私も、その悪だくみの片棒を担ぐんですか？

ルーシー 何も言わず、黙つて見ていらっしゃるなら。

ローリー 勿論……無理です。行きましょう。

ルーシー プロスさん。お願ひしまーす。（ローリーと

奥へ）プロスさん。ふふふ。

プロス （声）はーい、はいはいはい。ただいま。

プロス、扉を開ける。

大きなユリの花束で、登場するシドニーの顔が見えない。

シドニー これを！

プロス ……白百合は乙女の純潔……私が頂くには、年季が入りすぎておりますわね。

シドニー （花束から顔を出す）え？（困惑するが）：

…ああ。……どうぞ。

プロス お嬢様にお持ちになつたのでしょうか？

シドニー いや。手ぶらで来るのは、気が引けて……。百

合は嫌いですか？

プロス いいえ！

シドニー では、どうぞ。

プロス (受け取る) まあ。いい匂い。どうぞ、お座りになつて。あら、皆さん、書斎かしら？ お待ち下さませね。お呼びして来ますわ。

プロス、花を抱えたまま、一旦、奥へと行く。

プロス (声) 皆さん、チャールズ様がお見えになりますた……。

プロス、飛ぶように戻つて来る。

プロス ええっ！ (シドニーを見て) ええっ！

ルーシー、嬉しそうに飛び出してくる。

ルーシー (手を叩いて喜ぶ) 驚いたでしょ？ 本当にそつくりなんですもの！ 紹介するわね。

マネット 今日のチャールズの勝利は、彼のお陰なのだよ。

ローリー (やつて来る) ただの他人の空似ですよ。

プロス ……ええつ? 他人の空似?

ルーシー 紹介しますわ。カートン様、こちら、プロスさ

ん。私の家庭教師。

シドニー (椅子から立ち) シドニー・カートンです。

プロス シドニー・カートン様……まあ……チャールズ様
と、何から何まで、そつくり!

ローリー (咳払い) お宅の弁護士事務所では、晩餐会に

助手が代わりに出るのですかな?

シドニー ……ああ、あの……すみません。

ローリー もしや、私の所為で、お運び頂けないのでは?

シドニー 俺はすぐ帰ります。確かめたい事があつて。

ローリー すぐ帰る? とんでもない。此処はイギリスで

す。イギリス人が居る時はユダヤ人が遠慮するのが筋。

シドニー どうぞ、此処にいて下さい。邪魔をするつもり
はありません。

マネット 確かめたいことは?

シドニー チャールズ・ダーネイは?

マネツト　　書斎にいるよ。イギリスがカトリックを離脱した経緯を夢中で読んでいる。

シドニー　　ああ、ヘンリーエ世の離婚。

マネツト　　そう、六人の妻の話。

シドニー　　では、宜しく伝えて下さい。僕はこれで。

ルーシー　　まあ、いけませんわ。

プロス　　そうですとも。

マネツト　　君は、何を確かめたいのだね？　聞かせて貰え
ないか？

シドニー　　いえ、ただの俺の癖なんです。納得できる合理的な理由が知りたい。

マネツト　　と、言うと？

シドニー　　俺は今日の裁判は誰かの陰謀だと思うんです。

あんな杜撰な証拠や証人をオールド・ベイリーが扱うのは実に妙だ。彼はフランス人だ。だからその元凶はフランスにあつたのではないかと。

マネツト　　元凶……。

シドニー　　そうです。フランスで何かがあった。相手は、

イギリスにまで、圧力を掛けられる人物……おそらく政治的な力がある。フランスなら、闇から闇に葬られる所だ。命を奪われるか、監獄に閉じ込められるか。

マネット ……（胸を押さえる）監獄。

ルーシー お父様？ まあ、大変。お顔が青いわ。

ローリー （厳しく）そこのお若いの。無神経ですぞ。マネット先生の前でそんな話を！

シドニー （ハツとして）すみません、謝ります。嫌な話をしました。マネット先生の、苦労はロンドン中、みんな承知している事なのに。

マネット ……いやいや。（誤魔化して）いいんだよ。私が尋ねたのだ。お腹が減ったよ。シドニー、そう呼んでも構わんかね。一緒に食堂へ行こう。

シドニー ……俺は。

マネット 率直な意見を是非聞きたいのだよ。さあ。

ルーシー そうですね。チャールズ様と並んでお座り下さいね。

マネット、シドニーを誘い、ルーシーと腕を組んで、奥の食堂へ。

ルーシー (声) チャールズ様。お食事の支度が出来ました。いらして下さいな。

ローリー 私は失礼しますよ。

プロス 今日はビーフステーキなのに?

ローリー 私の事を気にして下さつて有難う。

プロス 当たり前じやありませんか。週に三度は顔を合わせるんですよ。情を挟まないのが信条だつたはずの銀行家と。もう、家族同然ですよ。

ローリー プロスさんのご親切は分かっています。貴女は決して、私に豚や兎を出しません。私をシャイロツク呼ばわりしません。

プロス ローリー様だつて私を赤毛だと嗤つたりしないでしよう? 生まれつきの事や、その人の努力で変えられない事を貶めるのは卑怯な事です。それを教えてくれたのは、ローリー様ですよ。

ローリー 最近、ふと不安になるんですよ。フランスがアメリカに加勢してから、イギリスは圧倒的に不利です。戦争が長引けば、国の財政が逼迫します。その場合、歴史的に見て、私達の民族は、財産を取り上げられて追放されます。

プロス ローリー様。どんな時でも、腹揆えはしなくては。よろしいですか？ フランスでは、牛肉は煮込み料理しかないんですよ。畑で働けなくなつた牛を潰しますからね。焼く方法では固くて歯が立たない。

ローリー その点、イギリスでは、食用に牛を育てます。プロス それが、今日はまた、特別にいい肉をご用意いたしました。ソースは玉ねぎをトロトロになるまで炒めて赤ワインをじゅつ……。

ローリー (ゴクリ) ……プロスさんの料理は絶品です。プロス 私も今では、自分が家庭教師だつていう事を忘れるぐらいですわ。

ローリー さすが美食家で知られたプロス家の娘さんです。

プロス ……その話は、皆さんの中へしないで下さいよ。

ローリー 勿論です。……当時、私は身寄りのない十歳の娘さんの養育に悩んでいました。

プロス 私は、差し押さえられた館に一人取り残されて。

ローリー 頭取からその話があつた時、まさにうつてつけ

だと思いました。願つたり叶つたりの組み合わせ。

プロス あのまま冬を迎えていたら、私は凍え死ぬから飢え死にするかしていましたよ。

ローリー 正直に言えば、私も、飢え死にしそうですよ。

プロス では、行きましょう。どうぞ。

第一幕第七場

同じ日の夜遅く。ストライバーの法律事務所。

ストライバーが腰かけている。

シドニーがやつて来る。

ストライバー 遅かったな。ああ、こつち（分厚い書類）を

頼む。俺は今これを（薄い書類）と。さて、聞かせて

貰おう。祝勝会はどうだった？ なんて言つてた？

シドニー (グラスにブランデーをみなみと注ぐ) 何が？

ストライバー とぼけるなよ。お嬢さんだよ。俺の事なんて

言つてた？

シドニー 何つて何を？

ストライバー 僕は、あの娘と結婚してやろうと思うんだ。

シドニー ……結婚？

ストライバー 父親はバスチーユに閉じ込められていた有名人、しかも善良な医者として人気がある。そして、彼女は美人……そこに俺が加われば……完璧な家族じやないか。今日、法廷で俺はあの娘の気持ちに気付いた。俺を見る時、目が潤むんだ。

シドニー へえ。

ストライバー 僕がお前とシユールズ・ベリーで学んだことは言つたか？

シドニー いいや。

ストライバー お前とフランスに留学したこと？

シドニー いいや。

ストライバー なんでだよ！ だからお前を行かしたのに。

シドニー 面倒な奴だな。自分で行つて、自分で話せよ。

ストライバー 冗談だろ？ ユダ公がいるのに？ 一緒に食事なんかできるかよ！ 僕が結婚したら、あのユダ公は出入り禁止にしてやる。

シドニー それはどうだらう。

ストライバー 知つてるか？ エドワード一世がイギリスからユダ公を追放して三百六十七年間、この国にあいつらが一人もいなかつた時代があるんだぜ。さぞかしき清々しただらう。

シドニー でも、オリバー・クロムウェルが一六五七年にそれを廃案にした。

ストライバー 理屈屋め。お前に女心が分かるもんか。あの娘は俺に惚れている。ふふん。お前は下調べと作戦を立てる。俺は法廷で派手にぶちかます。それで全戦全勝。そんな俺の妻の座だぜ……！

ストライバー、ご機嫌で出て行く。

シドニー、黙つて酒を飲んで、書類に取り掛かる。

シドニー（ふと顔を上げ）ルーシー・マネット……。

第一幕八場

パリ、サンタントワーヌ、ドファルジユ酒店。

テレーズ、相変わらず熱心に編み物をしている。

カウンターに二人の客。

客のガスパール、仲間とカードをしている。

四頭立ての馬車が急に止まる音がする。

みんな一斉に顔を上げて外を見る。

ドファルジユ（駆け込む）おい！ 大変だ！ ガスパー

ル！ ガスパールは居るか？

ガスパール ここだ。

テレーズ お前さん、どうしたんだい？ 今、凄い音が。

ドファルジユ ステラが！ ステラが馬車に撥ねられた！

ガスパール ええ！（飛び出していく）ステラ！ステラ！

テレーズ それで、怪我の具合は？
ドナルジュ（首を振る）ステラは道に絵を描いていた……。そこに恐ろしく速い馬車が突っ込んできて……。

テレーズ そんな……一体、誰が……。

ガスパール、血まみれのステラを抱いて店に入つて来る。続いて街の住人たちもやつて来る。

ガスパール（呆然として）お女将さん……ステラが……
俺のたつた一人の娘が……。

エヴレモンド侯爵、人々を邪険に搔き分けて登場する。顔には白粉を叩き、金の刺繡のある豪華な出で立ち。

エヴレモンド 誰だ、あのバカな子供の親は!? まったく

お前たち平民は、自分の子供の面倒も見られないのか！　私の馬が怪我をしたらどうするつもりだ!!

ドナルジュ 侯爵様、どうぞお赦し下さい。あの娘は死にました。

エヴレモンド　ふん！　まだ生きていたら、鞭で死ぬまで打つてやる。（懐から金貨を出して投げる）これを。私は情け深い貴族だからな。

エヴレモンド、背を向けて帰ろうとする。

テレーズがすかさず、金貨をその背中に投げ返す。

エヴレモンド　（振り返り）金貨を投げたのは誰だ？

テレーズ　（編み続け）金貨を投げた？　そりや侯爵様だ。

住民たち、怒りを込めた視線を侯爵に向ける。

エヴレモンド　（圧倒されそうになるが）ふん！　馬鹿どもが！

エヴレモンド、出て行く。

ドナルジュ（金貨を拾い）……おい、ガスパール、これ
で弔いを……ガスパールはどこだ？

ヴァンジャーンス（駆け込む） ちょっと！ ガスパール
が！

ドナルジュ ガスパールがどうした？

ヴァンジャーンス 侯爵の馬車の下に！ 馬車の下に潜り
込んで鎖に捆まつて……こう踏ん張つて……馬車と
一緒に行つちまつたよ！

ドナルジュ なんだつて！

第一幕第九場

高い場所。パリから少し外れた場所にある、エヴ
レモンド侯爵の館。大きな窓がある。

召使い （やつて来て）侯爵様、シャルル様がお着きにな
りました。

侯爵

通せ。

チャールズがやつて来る。

チャールズ　叔父上。いえ、エヴレモンド侯爵。

侯爵　おお、来たか。我が甥よ。随分と時間が掛つ

たな。

チャールズ　一昨日。パリに着きました。いろいろとやるべき手続きがありました。

侯爵　シャルル……いや……今はチャールズか。品の

ない響きであるが、我が甥よ。健勝で何より。

チャールズ　私が今、元氣で居られるのは、叔父上が国王に疎まれているお陰なのでしょうね。あのスパイは叔父上の差し金でしょう。

侯爵　なんと。これは、変わった挨拶だ。

チャールズ　ご報告をしに参りました。私は、二度とフランスには戻りません。侯爵である事も、父上からの財産も一切、放棄致します。手続きは完了しました。

侯爵

馬鹿な事を。侯爵家の跡継ぎを放棄？　わが双子の兄が草葉の陰でどれほど嘆いている事か。

チャールズ　叔父上には見えないのですか？　骨と皮だけの農民の姿が。この不作の中、食べる物もない。心は痛まないのでですか？

侯爵　（笑う）心が痛むだと？　百姓と言うのは随分、

丈夫な物なのだ。あれで、なかなか死なないのだ。

チャールズ　エヴレモンドの家系も、そしてフランスも、呪われています。農民から搾れるだけ搾り取る栄華など、続きはしない。

侯爵

家庭教師のギャベルがお前に新しい思想とやらを吹き込んだのは知っている。それにかぶれているのだな。では、お前はどうやって暮らして行く？

チャールズ　ギャベル先生は立派な方です。私も先生のようになります。

侯爵　　働く？　卑しい者のように働くと言うのか？

チャールズ　その通りです。私はこれから自分の力でやつて行きます。

侯爵

よほどイギリスとは魅力のある国のようだ。それに隠れるのにも都合がいいらしい。知っているぞ。お前は、同じようにフランスから逃れた者と親しいだろう。娘のいる医者だ。

チャールズ ……お詳しいようですね。でも、叔父上には、一切、関係のない事です。後の処理はギヤベル先生に任せてあります。では、これで。さようなら。

侯爵 戯言を……我がエヴレモンドの血筋は永遠に榮

えるのだ。家名に泥を塗るような真似は許さない。

チャールズが去る。夕闇に紛れてガスパールが窓から、部屋に忍び込む。

侯爵の背後からナイフを振り上げる。

素早く暗転

第一幕第十場

ロンドン、夜の歓楽街。賑やかな嬌声が聞こえてくる。街灯（オイルランプ）がある。

プロス、花売りとすれ違う。

プロス 今晚は。ねえ、百合はない？ 白い百合。

花売り 今晚は。（籠を見て）……ああ、一本だけなら。

プロス そう、じゃあ、それを頂くわ。

花売り いい匂いがするよ。夕方、花が開いたんだ。

プロス いい香り。白百合は特別だわ。

花売りにお金を渡し、白百合を受け取る。

シドニーが通りかかる。

シドニー あれ？ プロスさんでは？

プロス ……（後ろ手に花を隠す）まあ。今晚は。

シドニー こんな時間に、一人で歩くのは危険ですよ。

プロス 私は大丈夫です。マネット先生のお使いで、お薬を届けに行つた帰りです。貴方こそ、飲んでいらっしゃいますね。足元にお気を付けて。

シドニー この間の、あれ、旨かつたなあ。あれはクレー
プ？ ジヤガイモが載つていた……。

プロス ……ああ、あれはガレットです。では。

シドニー　待つて。料理が上手な秘訣は？

プロス　秘訣？　ホテルの料理人からレシピを買うんです、一シリングで。なるべく、フランスとイギリのス料理を一緒に出すようにしているんです。

シドニー　貴女は、貴族の出身？　言葉に品がある。

プロス　貴族ではありません。地主の娘でした。もう昔の話ですけど。お嬢様は質素な方ですわ。修道院にいらしたから。

シドニー　（呟く）そうか、修道院に……。レシピだけで、あんなに旨い料理ができるものなんですか。

プロス　まあ、それは、勘ですね。父が食通だつたので：　…。金に糸目をつけなかつたんです。この太陽の沈まぬ大英帝国の、ありとあらゆる土地から珍しい食べ物を取り寄せていました。それで財産のほとんどを無くしたんですけど。

シドニー　もしや、貴女はプロス家のプロスさん？

プロス　ええ、そうです！　ご存知で？

シドニー　勿論。金と同じ目方のお茶を飲むのは、国王と

プロス家の人々だけだと、聞いたことがある。なるほど、それで舌が肥えているんだ。

プロス とんだ道楽でしよう？ 両親が亡くなつた後、僅かに残つていた館は、弟が友達を助ける為に取られてしまつた。ソロモンは……弟は今も行方知れず。それで、お嬢様の家庭教師になつたんです。お料理も、何でもしますけど。ダンスも私がお教えしたんですよ。シドニー 僕も昔、ダンスを習つた。信じられないでしよう。

（礼儀正しく） プロスさん、一曲お願ひします。

店から軽快なワルツが聞こえて来る。

プロス、応じて、思わず百合を持つている手を出す。

プロス あのこれは、……お嬢様にと思つて。

シドニー ……とても美しい。

二人、夜道を踊る。

ソーホーのマネットの家の前に来る。

プロス 送つて下さつてありがとうございました。

シドニー (視線を上に投げる) おやすみなさい。

プロス おやすみなさい。(見送る) ……貴方、私をダシに使いましたね。お嬢様に一日会いたくて。

第一幕第十一場

ソーホーのマネットの家。朝。

診察前のマネット様が新聞を読んでいる。

プロスがやつて来る。

プロス マネット先生、チャールズ様がお見えになりますた。

マネット チャールズが? どうしたんだろう? こんなに早く? 会うよ。

プロス どうぞ。

チャールズ、せかせかとやつて来る。

マネット やあ、チャールズ。どうしたんだい？ 具合でも悪いのかい？

チャールズ いいえ。今日は、マネット先生にお話があつて伺いました。実はパリに行つてきました。

プロス お茶をお持ちしましょう。

プロス、台所に行く振りをして、壁にぴつたりと張り付く。

マネット まあ、座り給え。そうそう、ローリーさんから聞いたのだが、君はケンブリッジでも教えているんだつてね。

チャールズ はい。安定した生活が出来るよう、努力しています。先生、この一年半、私を温かく受け入れて下さつて、本当に有難うございます。

マネット ……そうか。何か改まつたことを言うつもりだね。父親として、その類の話は避けられないだろうね。ルーシーのことだろう。

チャールズ　　はい。私はルーシーさんを愛しています。

マネット　　いきなり来たね。それで娘には、もう、打ち明けたのかね？

チャールズ　　いいえ、まだ。

マネット　　娘が君を好きならば、私は止められないよ。

チャールズ　　パリに行つたのは正式にフランスを離れる手続きの為です。私の家はフランスでは古い家ですが、イギリスでは、母方の姓を名乗っています。実は……。

マネット　　待つてくれ、チャールズ。その先は、もし、二人が、家庭を持つ……そうなつてからでいいのでは？今、全部聞いてしまつたら、私はきつと反対したくなる。そう、先を急がんでくれ。目が回る。

チャールズ　　……妙なことを申し上げてしまつて。

マネット　　いいや。一人の気持ちが一番なのだよ。他の事は結婚式の朝にでも、打ち明ければいい。

第一場第十二場

同じくマネットの家の台所（スポット）。

プロス、パンの種を調理台に叩きつけている。

ルーシー、やつて来て。プロスの背中に抱き付く。

プロス どうしたんです？

ルーシー どうもしないわ。私、一生結婚なんかしない。
ずっとお父様とプロスさんの傍にいる。

プロス あら、まあ。貴嬢はどうしてそもそも容易く、ご自分
分の心を裏切るんでしょう。チャールズ様なら申し分
ないじやないです。

ルーシー ……どうして分かるの？

プロス 分かりますよ。

ルーシー 不安なの。私を愛して下さるかしら。

プロス 勇気を出してお父様に打ち明けてご覧なさい。私
が請け負いましょう。万事上手く行きますよ。

第一場第十三場

マネット家の居間。ルーシーがやつて来て刺繡
を始める。

ドアノックカーの音。プロスが出る。

プロス (やつて来て) お嬢様、シドニー様がお見えです。

ルーシー シドニー様? どうぞお通しして。

プロス、シドニーを通し、出て行く振りで壁に張り付く。

ルーシー 父は生憎往診に出かけておりますが。どうぞ、お掛けになつて。まあ、お顔の色が悪いように見えますわ。

シドニー ええ。酷い顔でしょう。俺は酒で人生を潰したんです。貴嬢に心配して頂く価値もない。まったく燃えかすのような人生です。でも、貴嬢に会つて、そんな生活を改めたいと思つたんです。

ルーシー 私も父も、シドニー様が健康になるように、お手伝いしたいのですわ。

シドニー 貴嬢は俺にもう一度、人並みの人生を送る希望

を与えてくれた。

ルーシー ……どうお答えしたらいいのか。

シドニー いいえ、答えは要りません。俺は、何度も試してみました。まつとうな人生を送れるように。でも、結局自分が軽蔑する世界に引きずられてしまう。

ルーシー 捨て鉢になつてはいけませんわ。

シドニー 初めてお目に掛かつた時から、ずっと、貴嬢が好きでした。でも、俺は相応しい人間ではない。そんな事分かっているのに。でも、今日は伝えたかった。ルーシー 貴方は特別なお友達ですわ。心がお辛い時には助けになりたい。

シドニー その言葉で、俺は救われる。どうぞ、この

事は誰にも言わないで下さい。

ルーシー 勿論ですわ。

シドニー これからあなたの生涯の伴侶となる人にも。

ルーシー ……まあ。ええ。決して。

シドニー 有り難う。今日は、俺の最良の日です。お返しに、いつか、貴嬢の為に、……その必要がある時に、

俺は貴嬢と貴嬢の愛する人の為に、この命を喜んで捧げます。それが俺の望みです。どうぞ、覚えていて下さい。そしてもし、その時が来たら、今のこの俺を思い出してください。これが俺のありつたけの誠意だったのだと、そう思つてやつて下さい。美しい方、貴嬢とそのご家族に祝福があるようになります。

第一場第十四場

パリ、サンタントワーヌのドフルジューの店。

客がカウンターでワインを飲んでいる。

テレーズ、熱心に編み物をしている。

バーサッドやつて来る。

バーサッド やあ、こんにちは。

テレーズ いらっしゃい。

バーサッド コニヤックを。

テレーズ （グラスに酒を注ぐ）……。

バーサッド マダム、何を編んでいるんです？

テレーズ 何つて、別に。こうして手を動かしている間は、
いつとき心が静まるしね。

バーサッド そうでしようねえ。全くやりきれない。気の毒
なガスパール。（客に）ねえ、そうでしよう？

テレーズ （さりげなく髪に薔薇を挿す）誰ですって？

客、その合図で店を出て行く。

店に入つて来た客も、薔薇を見て、引き返す。

バーサッド なんて世の中なんだろう。氣の毒なガスパール。
吊るし首にされて。ご存じでしよう？

テレーズ ……人を殺したなら、それは仕方がないね。

バーサッド （顔を寄せて）本当の所、この近所じや、ガス

パールの事で、怒りが爆発寸前らしいじやないです
か？ マダムも、その件には一言あるでしよう？

テレーズ （警戒して）私は何にも言つてないね。あんた
がそう言つてるだけだ。

バーサッド 実は私、ロンドンで、あのマネット先生とは

懇意でね。ほら、ご主人が、先生の使用人をしていた
んですよ。だからここに匿われた。娘さんがイギリ
スに引き取つて行つたでしょ？ そうそう、ユダヤ人
と一緒に来たんですよね。テルソン銀行の……鬘を被
つた。今でも、あの一家とは親しくしているんです
か？

テレーズ　いいや、あれつきり。一度、お礼の手紙が来た
けれど。私達も生活に忙しいもんね。あんた、イギ
リス人だろう？ パリの事にも詳しいじゃないか。

バーサッド　おや、イギリス人だつて分かります？

テレーズ　は！ 一目でね。何か探りに来たのかい？

バーサッド　（ドキリとするが）まさか！ 私は虐げられ
た人々の声なき声を代弁したいだけです。

テレーズ　虐げられた？

バーサッド　そうですとも。それでね、そのマネットさん
のお嬢さん、もうすぐ結婚するんですよ！ 相手はフ
ランス人。しかも……あのエヴレモンド侯爵の……双
子のお兄さんの方の息子！

テレーズ（思わず）えつ。

バーサツド 思えば、奇妙なご縁ですよね。その甥は名前をイギリス風にチャールズ・ダーネイと名乗っているんです。母方の名前、ドルネをイギリス風に替えてね。勿論、エヴレモンド侯爵の身分は隠しています。

高い所にスポット。マネットが靴を作っている。

テレーズ（編み続ける）これ、あんたに似合いそうな色だね。良く動くその口に突っ込んでやろうか？

バーサツド（銀貨を置いて立ち上がる）……じゃあ、また来ます。

ドナルジュ（奥から顔を出す）奥で聞いてたよ。ちゃんと記録したかい？

テレーズ（編み続ける）ああ、ここに全部、記録したよ。

第一場第十五場

マネット、トントンと木槌を使っている。

ソーホーの居間では、ローリーとプロス。

プロス (心配そうに) ああして、もう八日も経ちます。

昼はウトウトされますが、夜はずつと靴を作つていらっしゃる。お食事も召し上がるない。返事もしない。

ローリー ルーシー達の新婚旅行は二週間。あと一週間で恢復するものなのだろうか？

プロス お嬢様はどんなに悲しむでしょう。

ローリー さっぱり分からない。いつたい何があつたんだ。

プロス 結婚式の日の事を何度も思い出しているのです。

式の直前まで、書斎でチャールズ様と話し込んでいらっしゃった……部屋から出て来た時、先生のお顔は青ざめていらしたような……。でもそれは、お嬢様の結婚のせいで緊張されているのかと。

ローリー ……おや。音が止んだ。

高い所にある、マネットの書斎。

ローリーとプロスが、急いで駆け付ける。

マネット何事もなかつたように、振り返る。

マネット やあ、ローリーさん、おはよう。昨夜はルーシーと話し込んでしまつたよ。今日が結婚式だと思うと、感慨深くてね。

ローリー 今日が結婚式？

プロス 何も覚えていらつしやらない？

ローリー ……その前に、重要なご相談があるので。

マネット どのような。

ローリー ある方の事なのです。専門家の意見を是非とも伺わなければ。

マネット ある方……。

ローリー ええ。若い頃、その方はとても酷い目に遭わされたんですね。ずっと閉じ込められていきました。その時分に、仮に鍛冶屋のような事をさせられていたと思って下さい。その方には娘さんがあつて、解放された後、一緒に暮らし始めました。傍目には、辛い過去から立ち直つたように見えたのです。なのに最近、急にまた

鍛治屋の仕事をして。でも、平常心に戻ると鍛治屋の事はすっかり忘れておいでなのです。

プロス 私はその方の娘さんをよく存じております。

マネット （汚れた自分の手を見る）……！ （木槌を手に取り）……過去が蘇つたのだ。

プロス なぜ突然？

マネット きっかけが……何かきっかけがあつたんだ。

ローリー なるほど。

マネット その娘さんは、その事を知つているのかね？

ローリー いいえ。まだ何も、知らせていません。

マネット （強く）知らせなくとも良い。

ローリー では、その方に当時の鍛治屋の道具を捨てるよう勧めます。

マネット その道具は辛い時を支えた心の友なのだよ。

プロス 私なら、その娘さんの為に捨てますわ。どれほど娘さんが尽くされたか……。

ローリー 同感です。

マネット ……そうだな。捨てるべきだな。

ローリー では、少し公園に散歩に行きましょう。（プロスに目配せ） それから、プロスさんの美味しい朝ご飯を頂きましょう。

プロス（安堵し） 行つてらっしゃいませ。

マネットとローリーが出て行くと、プロス、靴作りのベンチを膝で真つ二つに折る。

第一幕第十六場

パリ、サンタントワーヌのドファルジユの店。

一七八九年七月十四日、明け方。

大勢の街の人々が店からはみ出して、マスケット銃、こん棒、弾薬、槍、斧を回している。

テレーズ、人を搔き分けやつて来る。

テレーズ お前さん！

ドファルジユ（武器を渡す） 様子はどうだ？

テレーズ（ガードルに拳銃を突っ込む） バリケードは出

来上がった。パリの道と言う道はみんな塞いだよ！

ドファルジユ よし、準備は出来た。

テレーズ 私は女達を連れて行く。……みんな！ この人をご覧！ うちの人！ サンタントワーヌのドファルジユさ！

ドファルジユ (椅子の上に立つ) 愛国者よ！ 友よ！

同志達よ！ 時は来た！ まずは兵士病院の倉庫から武器を頂く！ そして、目指すはバスチーユだ！

凄まじい咆哮が波のように広がる。ドファルジユを先頭にして、人々が出て行く。

第一幕第十七場

前場から三年年後。一七九二年八月。午後。

ドアノツカーの音。

チャールズ、やつて来て扉を開ける。

ローリーが訪ねてくる。

ローリー 遅くなってしまった。日曜なのに、銀行に行く急用ができてしまつて。

チャールズ 新聞で知りました。『王権の停止』ですつて？
ローリー ええ。バスチーユ襲撃から三年。ついにフランス国王が拘束されました。貴方も翻訳が忙しいでしょう。

チャールズ ええ。あまりに早く事態が変わるので、翻訳が追いつきません。今まで仕事をしてましたんです。

ルーシーとプロスがやつて来る。

ルーシー あら、いらっしゃいませ、ローリー様。
ローリー ここにちは。

ルーシー 今日は、涼しい風が通る中庭で食事をしましょう。今、父とシドニー様がテーブルを運んでいますわ。

ローリー おや、今日はシドニーが来ているんですね。

ルーシー 娘のままごとに行き合つてくれて。シドニー様は子供の相手が上手ですわ。

チャールズ

僕はルルとシドニーを遊ばせるのは反対だ。

ルーシー まあ、どうして？

チャールズ ……実は、昨日、ルルから「大きくなつたら、

シドニーと結婚したい」と打ち明けられたんだ。

ルーシー （笑う）あらまあ。

プロス （笑う）お嬢様は、おませさんですわね。

チャールズ 笑い事じやないんだ。ルルに悪い影響がある。

ルーシー 悪い影響つて？

チャールズ ……シドニーは大酒飲みだし。

プロス シドニー様がお嬢様にお酒を勧めた事は、一度

もありませんよ。それどころか、ここに来るときは、

お酒を一切、飲みません。

ローリー 確かに、真面目腐つて、お茶を啜っていますね。

プロス 一年に、三回か四回しか来ない方ですわ。

ローリー 私は一週間に、三回か四回ですがね。

チャールズ ルルがシドニーを好きだつて言うんだよ。

ルーシー 落ち着いて。ルルはまだ八歳なのよ。ねえ、チ

ヤールズ。もっと寛大な気持ちでシドニー様を見て頂

きたいの。あの方は、心に深い傷を負つていらっしやる。きつとお父上の期待に沿えなかつた事を、後悔して自分を責めていらっしやるんだわ。でも、優しい方。の方には、真心がある。何より、私の夫を救つてくれた恩人なんですもの。

チャールズ ……（奥へと）庭を手伝つて来よう。

プロス ジエラシーですかね。

ルーシー 私はテーブルクロスを。

プロス では、私はお料理の盛り付けを。ローリー様もどうぞ、中庭へ。

プロスとルーシー、出て行く。

ドアノックカーの音。

チャールズが駆け戻つて来る。

チャールズ 僕が出ますよ。（扉を開ける）おや、これ

は、ストライバーさん。

ストライバー やあ。一応、覚えていてくれたかい？ 君の

弁護をして勝利を勝ち取った私を。

ローリー ……では。私は、先に。貴方にお話があつたん
ですが。また後で。

チャールズ いえ、ここに居て下さい。すぐ済みます。

ストライバー すぐ済む？ ああ、すぐに。今日は君に仕
事を持つて来たんだよ。この度、結婚してね。それで
いきなり、三人の息子を持つたんだ。で、どうだろう、
君を息子たちの家庭教師として雇おうかと思つてね。
チャールズ 僕は今、フランスから新しい思想の本が、
次々に出るので、その翻訳で手一杯なんです。

ストライバー ひよつとして、私の申し出を断るのか？

チャールズ 申し訳ありません。一刻とフランスの情勢
が変わつて行くので、目を離せないんです。

ストライバー くだらない。あんな馬鹿ども、まとめてふ
つ飛ばせばいいのに。ああ、そうか。君は最初から逃
げているからな。安全なロンドンで高みの見物だ。

チャールズ ……ご用はそれだけですか？

ストライバー 息子たちには、腰抜けじゃない家庭教師を探

そう。ここはあまりにも、（ローリーを見て）変わった人種が集まる家庭だからね。

ストライバー、ふりふりして出て行く。

ローリー 彼は、金持ちの未亡人と結婚したんですよ。

チャールズ 僕は逃げた訳じやない。

ローリー 勿論です。人生には決断が必要です。実はね、

チャールズ、私も自分の決断を信じているんです。パリ支店に赴任することにしました。

チャールズ えつ！ パリに……いけません！ 今、パリは無法地帯です。秩序がないのです。危険すぎます。

ローリー チャールズ、私はもう七十八です。独身で、しかも、パリ支店の業務を熟知している。

チャールズ 生きて帰れる保証はないのですよ。

ローリー けれど、家族のある人には、気の毒です。

チャールズ 貴方を家族のように思っている私や妻、娘、

そして、心からの友と思うマネット先生は？

ローリー 優しい言葉をありがとうございます。この事は、まだ誰にも言わいで下さい。

チャールズ ……勇敢な判断です。でも……。

ローリー 誰かが行かなければ。フランスの顧客の財産を守らなければなりません。……それから、（内ポケットから手紙を出す）頭取から探すように頼まれていました。この手紙の、シャルル・エヴレモンドと言う方に心当たりはありませんか？

チャールズ ……シャルル……エヴレモンド、ですって？

ローリー 銀行は今や、亡命貴族のサロンです。そこで無事を確かめ合つたり、新しく逃れてきた貴族にフランスの情勢を尋ねたり……このエヴレモンドは侯爵です。誰も行方は知らないらしい。貴方の仕事の関係先に、もしかしてと思って……。

チャールズ 知っていると思います。預かりましょう。

ローリー 助かります。では、行きましょう。

チャールズ ……。

ローリーが去ると同時にチャールズ、手紙を読む。

チャールズ（読む）……「親愛なるシャルル・エヴレモン
ド。私は捕らえられてしまった。領地の人々の借金を
棒引きにし、侯爵が得た税金を人々に返すよう、貴方
の意志を果たすべく努力をしてきたのに。貴方の証言
がなければ、私は処刑される。一七九二年六月二十一
日　パリ・アベイ監獄にて。テオファイル・ギヤベルよ
り」……ギヤベル先生が！　監獄に！

幕

第二幕第一場

一七九二年九月の終わり。パリ・サンジエルマン通りある元貴族の屋敷、中庭。

舞台中央にスポットが当たると回転砥石。

屈強な男が二人、両側にある取っ手を回してい
る。

砥石に短刀を充てる男。火花が閃く。揃いの粗末
な布の赤い帽子を被つた大勢の男女が薄暗い中
に蠢いている。

上手にスポットが当たると、その屋敷の中にある、
テルソン銀行のフランス支店の部屋。

今しも、ルーシーとマネットが駆け込んできた様
子。

ローリー ええつ！ 此処は、フランスですよ！ ルーシ

ー！ 一体どうして貴女がパリにいるのです！

ルーシー チャールズが！ チャールズが！ （叫ぶ）

フランスに来ているのです！

高い所にスポット。牢に入れられたチャールズ。

ローリー なんですと！ チャールズがフランスに？

マネット 私たちは後を追つてきたのだ。チャールズはパ

リに入る時、往来審査ゲートで身柄を拘束された。

今はラフォルス監獄にいる。

ローリー なんて危険な事を！ あの庭に居る連中が、今日、何をしたか知っていますか？ いいえ、窓には近寄らないで下さい。刺激しない方がいい……。パリの民衆はみんな殺氣だっています。プロイセンが攻めてくると言う噂があるのです。

マネット パリのゲートで聞いたよ。

ローリー 一昨日、プロイセンがフランスの要塞を陥落し

たのです。そのまま、パリに乗り込んで監獄に居る反革命派を助けて、パリも制圧する……あくまで噂です。

マネット それでも、民衆は動搖して、暴動があちこちで

起きている。監獄から囚人を引き摺り出して、斃り殺

しにしているのだ。街灯に腸を搔き出された死体がいくつも吊るされていたよ。

ルーシー (泣いている) チャールズは無事でしようか?

ローリー 惨たらしい事を……ああ、これは血の匂いだな。
ところで、プロスさんとルルは?

マネット 廊下で待たせている。話によつてはルルには聞かせられないと思つて。

ローリー なんと、全員パリに来たんですか。パリのゲートをくぐるのは容易いが、出て行くのは非常に困難ですぞ。チャールズはいったい何故、パリに?

マネット 置き手紙があつた。恩師の無実を証明する為だと。もしもの時はローリーさんを頼るから、心配無用……。

ローリー とんでもない。心配だらけです。確かに、革命軍はテルソン銀行には手出しをしません。資金の調達には我々が必要ですから。この支店も、元は貴族の館でした가、今は革命政府の指導者が使っています。その一室を借りてゐるわけです。ですから、ここは安全

です。チャールズも、この何日かを無事にやり過ごしていれば……すでにイギリスに住んでいるのですから……。

マネット

ところが、チャールズは侯爵の直系だったのだ。

ローリー 侯爵ですって！ チャールズが貴族だと、そう

仰るんですか！

ルーシー それが……エヴレモンド侯爵なのだと。

ローリー エヴレモンド……？ あの双子の悪魔？ 極

悪非道、悪の権化と言われる、あの……？ 驚きすぎて脳みそがでんぐり返りそうだ。

マネット その事を結婚式の朝、打ち明けられたのだよ。

ローリー

なんていう事だ。事態はとんでもなく困難ですぞ。ところで、何故この場所が分かりましたか？

マネット パリのゲートで聞いたのだ。チャールズがラフ

オルス監獄に入れられた事も教えてくれた。何とも

不思議だが、皆、私を知っていると言うのだ。私が

バスチーユに十八年間閉じ込められた事を知つていて、私だと分かると抱きしめたり、握手をしたり

してくれる。

ローリー それでは、するべきことは一つしかありません。

あそこへ行つて、あの連中と話をしてください。そして、チャールズの情報をもつと詳しく聞きだすのです。

マネット そうだ。そうしよう。

マネット、出て行く。やがて、人々の輪に入り、何人かに抱擁され、先頭に立ち中庭を出て行く。

ローリー 実務家として申し上げますが、この館に侯爵にかかるるご一家を匿う事は出来ません。私はパリの顧客……もうすぐ処刑されて、没収される財産を管理する為にいるのですから。

ルーシー 承知しておりますわ。父とも、どこかに部屋を借りようと話しておりました。

ローリー それでも、出来るだけの事はします。中庭の門を出た所に、人目に付かない使用人の住まいがあります。狭いですけれど、借りられるように話を通し

ておきましょう。そこなら中庭の門を潜ればすぐ。
近くて便利です。もう一つ。ご存じでしょうが……
パリでは、恐ろしい物が登場したのです。……本当に、こんな事は、ルルには聞かせられないが。

チャールズのスポット消える。

さらに高い所にギロチンの影が映し出される。

刃が落ちる音。

第一幕第二場

前場より、一年三か月後の一七九三年十一月。

パリ、マネットの家。

九歳のルルは黒い質素な装い。テーブルの下に隠れて背中を向けて泣いている。

プロス、ルルを探しながら登場する。

プロス

ルル様？ ルル様？ 奥さまがお出かけになりますよ。（テーブルの下を見て）ルル様。まあ：

：（膝を付く）お嬢様……。

ルル ロンドンに帰りたい。こんな臭い街で二度目のクリスマスなんて絶対、嫌よ。

プロス 同感ですわ。私は最近、口で息をするようになりました。その代わり、鼻で喋れるようになつたんです。まるでフランス人のようでしょ？

ルル 道と言う道に……。

プロス そうそう！ 何しろ、窓からおまるをぶちまけるんですよ！ 私のような赤毛は、目立ちますからね。狙つてくるんです。ロンドンなら罰金ですよ！ よくもまあ、こんな汚い街があつたもんですよ。

ルル いくら道に板を渡しても、ズブズブ沈むだけ。

プロス 『パリは野壺にあり』！

ルル （少し笑う）おじい様は？

プロス 午前中の診察を終えて、お出かけになりましたよ。

ルル おじい様は、根気強い。へこたれないわ。

プロス 頭が下がりますよ。私たちがパリに着いたその日

に、ラフォルス監獄の担当医になり、時間があれば、

街の人の診察をしていらつしやる。そして毎日、革命委員会を説得して回つて……どこからあんな力が出るのか……チャールズ様が公正な裁判を受けられるよう力を尽くしていらつしやる。

ルル ああ、パパに会いたい。ロンドンに帰りたい。シ

ドニーの小父様に会いたい。

プロス ……シドニー様。

ルル もう、一年と三か月も会つていないわ。

プロス それでも、シドニー様は安全なロンドンに居らつしやる。それが何よりいい事ですよ。奥様がお出かけになりますが、お嬢様は？

ルル 行くわ。ラフォルス監獄の高窓から、下の道が見

えるんですつて。でも、私達からパパは見えない。

プロス 今日は、雪が降りそうですよ。

ルル、立ち上がる。プロス、その裾を直す。

プロス 背が急に伸びましたわね。裾を少し出した方がいい

いかしら。ルル様、何度も、同じ事を申し上げますが、決して……。

ルル パパに手を振つたり合図を送つたりしてはいけません、でしよう？

プロス ええ。薪屋があるでしよう？ いつも奥様の様子を窺つているんです。用心しないと。今、パリでは密告が流行つているんですよ。

ルル （大人びて）心がけます。

プロス 私も参りますよ。どこかで肉を手に入れなければ。

第二幕第三場

ラフオルス監獄の横の道。

雪が舞つている中を、ルーシー、ルル、プロスが歩いてくる。ルーシーも質素な黒いドレス。

上手の辺りで止まる。

ルーシー （さりげなく下手奥の高い場所を見る）さあ、

ちょっとここで一休みしましようか。

ルル

はい、ママ。（小声で）薪屋のおじさんが……。

薪屋、ルーシーを見つけると、ぬーつと下手奥から出て来る。赤い布製の帽子。鋸を手にしている。

ルーシー（愛想よく）こんにちは、市民。

薪屋（こんにちは、市民。あれあれ、今日もちっちゃ

な市民が一緒だな。赤毛の市民も。

プロス（不愛想に鼻で話す）あら。こんにちは、市民。

ルーシー（巾着からお金を出して）ここで休ませてくだ

さいな。市民、どうぞこれでお酒でも。

薪屋（ほほう！）（受け取り）どこで休もうが自由だ

よ。そうさ、『自由・平等・博愛。さもなければ死を！』見てくれ（鋸を見せ）これがうちの小さなギロチンさ。

ルーシー、はつと胸を衝かれる。

赤い帽子の粗末な成りの女が一人、下手奥の道から走り出てきて、ルーシー達の前で止まる。舌

を出して目をぐるぐる動かす。ぱらぱらと数人の女達がルーシー達の前に集まる。バイオリンの音と共に、手を繋いでルーシー達をとり囲み、廻り出す。さらに大勢の男女集まって来る。幾重にもなった人の輪。髪を振り乱して、踊り狂う。

ルル
ママ！

ルーシー
(ルルを抱きしめる) ルル！

プロス、ルーシーとルルを庇う。

マネット医師、下手からやつて来る。

マネット ルーシー、じつとしておいで。

ルーシー お父様！

マネット 大丈夫だ。彼らは何もしない。じつとしているさい。

薪屋も輪になつて踊る。突然、けたたましく笑い

出す者や、ばつたり倒れ込む者。狂乱のラ・カル
マニヨール。

突然、人垣が二つに割れる。

その間から、テレーズ登場。

ゆっくりルーシー達に近づいてくる。

そのあとにヴァンジヤーンスが従う。

民衆、走り去る。

テレーズ 市民。

ルーシー (恐怖で) ……奥様。

テレーズ 法律で「市民」と呼び合わなきやいけないんだよ。

ヴァンジヤーンス 法律さ、法律で決まってんだ。

プロス (ヴァンジヤーンスを押しのけ) あら、いかつい市民、ご機嫌麗しいといいんだけれど。

ヴァンジヤーンス ああん？

プロス 市民の奥様、こんにちは。

マネット (駆け寄り) こんにちは、市民。

テレーズ おや、マネット先生まで。お揃いで何をしてる
んだい？ こんな所で。

ルーシー 散歩をしておりました。

テレーズ 雪の降るこんな日に？

ルーシー はい。買い物のついでですわ。

テレーズ ここはイギリスの奥さんが来るようなところ
じゃないんだよ。 おや、お嬢ちゃんも一緒かい？

ルーシー はい、市民。フランスに来て、取り込みが続き
ご挨拶がすっかり遅くなりました。娘のルルです。

テレーズ この子、一人なのかい？ あんたたちの子供は。
ルーシー はい、市民。

テレーズ 良く顔を見せておくれ。

ルル ママ……！

ヴァンジャーンス ママ？ 甘ったれだね。顔を姐さんに
見せるんだよ。

マネット ……ルル。ドファルジュさんにご挨拶を。

ルル ……こんにちは、市民。（顎を掴まれ上を向か
され、苦し気に）はじめてお目に掛かります。

テレーズ ほう。何とも貴族のようなご挨拶だねえ。

ヴァンジャーンス ガキが気取っちゃつて。

ルーシー （恐怖を感じて、ルルを抱き寄せる）ルル！

テレーズ （甘く）いやね、顔をき、よく覚えておかないと、困るだろ？ いざつて言う時に。

ルーシー いざと言う時とは？

テレーズ こんな世の中だ。何が起こるか分からない。女

同士助け合つて行かなきや。

ルーシー お心遣い有り難うございます。（テレーズの手に口づけする）奥様は心の姉のような方です。

テレーズ あんたとは、浅からぬ縁があるしね。

ルーシー ご親切に、奥様。妻として母として、お願いたします。（テレーズの靴に額づいて）奥様にお縋りいたします。どうぞ、チャールズを……。

プロス （声をかき消すように）いいえ、それには及びませんわ。

マネット ドファルジュさんはとても多忙な方だ。個人的なお願いはきりがないのだよ。

プロス こちらの事はどう心配なく。

テレーズ ふーん。そうかい。それなら一つだけ言つておこう。私達はねえ、その子よりも小さい時分から、ずっと見て来たんだよ。それで、妻達や母達は、さんざん思い知ったのさ。その父達や夫達が無実の罪で監獄に入れられて、離れ離れになつても、だあれも助けちやくれなかつた。それどころが、何千何万と言う妻達や母達は着るものも、食べるものもなく、子供達を飢えや病から助ける術もなく、無視されてきた。この世の中の、ありとあらゆる不幸を見て來た。

ヴァンジャーンス 違いない。それより他に見るものはなかつた。

テレーズ 胸に手を当てて、よく考えてごらん。今更、あんた一人の妻として母としての苦しみが、私たちに何の意味を持つんだい？

ルーシー （弾かれるように） ……ああ。

テレーズ もうすぐ、ギロチンが始まる。フランス中から、何日もかけて、わざわざ見物に来るんだとさ。（高笑

い) お土産にはギロチンの玩具。大人気なんだよ。

テレーズとヴァンジヤーンス、去る。

プロス あの女。もしチャールズ様の命乞いをしたら、奥様を告発するつもりだつたんですよ。

ルーシー あの時は、あんなに親切にして下さつたのに。

マネット 今や、サンタントワーヌで、最も発言力のある

ご婦人だよ。沢山の人が彼女から告発を受けた。

プロス あんな女、決して味方じやありません。ここで泣いてはいけません。囚人に同情すると同罪と見做されます。

マネット その通りだよ。ルーシー。さあ、泣き止んで。

いい知らせがあるのだよ。

ルーシー いい知らせ?

マネット たつた今聞いたのだよ、明日、チャールズの裁判がある。チャールズは、今日のうちにコンシェルジユリーに移される。

ルーシー 明日……！ 裁判は首尾よく行くでしょうか。

マネット チャールズが受け取ったギャベルさんからの手紙もちゃんと証拠の中に入っている。私がこの目で確認した。貴族が必ずしも有罪とは限らない。特にチャールズは領地の人々に土地を与え、借金を棒引きにしている。希望を持つのだ、ルーシー。

ルーシー でも、お父様。革命裁判所には弁護士はいないと聞きました。

マネット ああ。けれど、私も証人として出廷する。裁判長はチャールズに同情的な人物だよ。

ルーシー (忍び泣く) ああ……。

プロス (自分の赤いストールをルーシーにぐるぐる巻き付け) 泣いてはいけません。さあ、あの薪屋が帰つてくる前に、行きましょう。

雪の降る中を静かに四人が去つていく。

高い所にスポット。

大きな背凭れの椅子、その背に白い乗馬コートが

かけてある。座っている人物は見えない。

ローリーがその相手に向かつて話している。

ローリー ルーシーから知らせがありました。チャールズがコンシエルジユリーに移されて、明日、裁判です。どうやら、革命政府は一枚岩と言うわけではないようです。常に党派同士の覇権争い。そしてこの一年余り、マネット先生への民衆の信頼はますます厚くなりました。貴方がパリに来た事を知れば、どんなに…：いいえ、言いません。言えば、糠喜びをさせてしまふかも知れない。

椅子に座っているシドニー（見えない）、椅子の肘掛けに肘を着く。その拍子にブランデーグラスを持つている事が分かる。

第一幕第四場

コンシエルジユリーの中の俄作りの裁判所。

舞台正面に証言台。中央よりに居るドファルジ
ュとテレーズ、ヴァンジヤーンス。

チャールズ、入廷し証言台へ。

上手からマネットとローリーが登場する。

ローリー 驚きましたな、マネット先生、これが裁判所
だなんて。

マネット もともと裁判所ではありませんから。どこの
監獄も囚人でいっぱい。急拵えの裁判所です。

ローリー 裁判はこの一度きり、弁護士もいない。

傍聴人A（声） 今日は、これで十五人が死刑！

傍聴人B（声） 速い、速い、一人五分も掛けねえや。

検事 （客席側から声がする） シャルル・エヴレモンド。

イギリス名、チャールズ・ダーネイ。亡命貴族法に
より、生命と財産を共和国に没収されなければなり
ません。尚、法令はエヴレモンドの帰国ののちに成
立したものでありますが、現在、施行されている法
令に則るべきものと考えます。

傍聴人C（声） くたばれ、共和国の敵！ 豚野郎！

傍聴席から、一斉に豚の泣き声。

裁判長（声） 静かに！ 皆さん、静かに！ 被告人に尋ねますが、イギリスに長く住んで居るというのは眞実ですか？

チャールズ はい。眞実です。

裁判長（声） では、亡命貴族ではないと言う可能性はありますか？

チャールズ 法の言う所の「亡命貴族」には当たらないと 思います。

裁判長（声） それは何故ですか？

チャールズ 私は自ら、エヴレモンド侯爵の爵位を放棄しました。その特權的地位を望まなかつたからです。爵位放棄の手続きは、十年も前に法に則り正式に完了しています。そしてイギリスに渡り、自らの労働によつて生計を立てて来ました。

裁判長　（声）被告はイギリスで結婚しましたね。

チャールズ　はい。妻はイギリス人ではなく、生粋のフランスの市民です。

裁判長　（声）奥さんの名前は？

チャールズ　ルーシー・マネット。そちらにいらっしゃる、ドクトル・マネットの娘です。

傍聴席からどよめき。

傍聴人A　（声）おい、聞いたか、マネット先生の娘婿だと！

傍聴人B　（声）マネット先生は、俺んとこのガキが夜中に熱が出た時、駆け付けてくれた！

傍聴人C　（声）うちは産後の肥立ちの悪いかみさんに、食べ物や薬をただ分けてくれたんだ！

裁判長　（ベルを鳴らす・声）静肅に。イギリスでの被告

の職業は？　また何故、今頃、帰国したのですか？

チャールズ　職業はフランス語を教える事、翻訳をする

事です。この度、帰国したのは、私の恩師からの

手紙を受け取ったからです。領民の為に、尽力したのに捕らえられたとの事でした。彼の潔白を証言するためにフランスに渡りました。

裁判長　（声）手紙とは、このギャベルと言う名の人物からですか？

チャールズ　そうです。その手紙はパリに入る時に没された物です。

裁判長　（声）証拠品として扱います。ただ、残念な知らせですが、ギャベイなる人物はアベイ監獄で死亡しています。

チャールズ　いつ！

裁判長　（声）詳しい事は分かりません。

テレーズ　（薄笑い）そりあ、残念なこつた。

ドナルジユ　（窘めるように）おい、声が大きいぞ。

テレーズ　構うこつちやない。私が手紙を書かせて（首を搔き切る仕草）、殺したのさ。

裁判長　（声）次に、証人を。ドクトル・マネット。

傍聴席から、拍手喝采。

マネット 私、アレクサンドル・マネットは被告であるチャールズ・ダーネイの証人として、良心に従い真実のみを申し上げます。私がバスチーユ監獄での十八年を終え、無事にイギリスに渡る事が出来たのは、偶然、船に乗り合わせた被告の善意の賜物と申し上げても過言ではありません。被告は誠実な人柄で、重税に苦しむフランス市民の苦しみを良く理解していました。ここで、ひとつ的真实を申し上げましょう。被告はイギリスに在つても貴族社会からは敵視され、アメリカ独立の支援者として、偽りの告発で裁判に掛けられたのです。

裁判長 （声）アメリカの独立ですと？

マネット 左様です。フランスが支持をしたアメリカの独立は、イギリスの貴族社会にとつて、大きな不安材料でした。被告は真心から、平等な世界を理想としていました。それを歪めて告発されたので

す。しかし、正義は、被告の無実を示しました。

卑劣なるスペイによつて陥れられた事が立証されたのです。

傍聴人A （声）無実だ！ その男は無実！

傍聴席から、「無実」の声が広がつて行く。

裁判長 （ベルの音・声）判決を言い渡します。被告人、

シャルル・エヴレモンドは無罪！

歓喜の声が響き渡る。

ド�アルジユ夫妻だけは、憎々し気な眼差しを向けている。

第一幕第五場

パリのマネットの家。

シャルズが扉を開け、マネットと共に家に入る。床に跪いて祈つているルーシーとルル。

チャールズ ルーシー！

ルーシー 貴方！ チャールズ！

ルーシーがチャールズの胸に飛び込んでくる。続
いてルルもチャールズに飛びつく。

チャールズ ルル、大きくなつた……どれ、お顔をよく見
せておくれ。

ルル パパ！

チャールズ ルーシー、なにもかもお義父さんのお陰だよ。

君からも良く、お礼を言つておくれ。

ルーシー (泣きながら) お父様、ありがとうございます。

マネット なあに。私はルーシーに助け出されたのだよ。

これでやつと恩返しが出来た。

プロス、やつて来て眺めている。

チャールズ プロスさん。

プロス　　（ハグ）お帰りなさいませ。（涙声）信じてお
りましたよ。

チャールズ　僕は幸せ者だ。

プロス　　今日はお祝いをしなければ。そうと決まつたら、
買い物に行つてきましよう。奥様は、チャールズ様
から離れてはいけませんよ。そこでぴつたり引っ付
いていらして。

ルーシー　プロスさん、夜道は気を付けてね。人が集まつ
ている道は避けて。喧嘩に巻き込まれないように。

プロス　　（ボンネットを被り）分かっておりますよ。もう

これでフランスとおさらばかと思うと、清々します。

ルーシー　しいつ。プロスさん、何処で誰が聞いているか
分からぬのよ。

プロス　　はいはい。でもね、私は根っからのイギリス人。
(膝を付く) 恵み深き国王陛下、ジョージ三世の臣民で
すわ。（国家を歌う）主よ、守れよ。わが父なる慈悲
の王――。

ルーシー　もう、プロスさん！

プロス ところでマネット先生、私たちはいつイギリスに戻れるでしょうか？

ルル クリスマスまでに帰れる？

マネット 今日の明日、と言うわけには行かないだろう。

すぐに動くのはチャールズにとつて危険だからね。プロス 辛抱強く機会を待たなければなりませんのね。弟のソロモンがよく言っていたように、『こうべを上げて低く戦え』！ さあ、行つてしましよう。

プロス、巾着と瓶の入つた籠を持って出て行く。

チャールズ まだ、夢のようだよ。

ルーシー 夢ではないわ。ルルはパパのお留守の間に沢山、

詩の暗唱が出来るようになつたのよね。

ルル はい。今日はバーンズの『春の曲』を覚えました。

チャールズ （ルルを抱きしめる）パパの大好きな詩だよ。

ルーシー お茶を淹れましようね。

マネット これでようやく、家族が揃つた。

カツプを取ろうとして、ルーシー緊張する。

ルーシー あの音は何？

マネット （耳を澄ませ） 音などしないよ。

ルーシー いいえ、誰かが来る！

マネット どうしたのだ、ルーシー。少し気が昂っているのじゃないか？ もう安心していいのだよ。チャールズはちゃんとここにいる。もう安全なのだ。

扉が乱暴にノックされる。

ルーシー お父様！ チャールズ！ どうしましよう。

マネット 大丈夫だよ。どれ、私が見て来よう。おおかた

ローリーさんだろう。

マネット、扉を開ける。

赤い帽子を被った三人の男がずかずかと入つ

て来る。拳銃とサーベルを携帯している。

男A 市民エヴレモンド、通称チャールズ・ダーネイ。

男B お前だ。お前はまた共和国に捕らわれた。

ルーシー いいえ！ この人は解放されたのです！

男B そのあと、またサンタントワーヌから告発を受けたのだ。

マネット 何故、そんな事になつたのですか？ いつたい

どんな罪で？

男A コンシエルジユリーに戻ればわかる事だ。お前は、

明日、また召喚される。

マネット 一体、誰が告発を？

男A それは規則で答えられない。

マネット 頼む、私に免じて教えて貰えないだろうか。

男C ……俺は先生を知つてゐる。俺はサンタントワーヌの出身だ。愛国者ドクトル・マネット。彼は三人

から告発を受けた。それは共和国にとつて重罪だ。

マネット 誰が？ お願ひだ。教えてくれ。

男C 　　ードファルジユ夫妻だ。

マネット　　ドファルジユ……夫妻！　あと一人は？

男B 　　貴方がそれを聞くか？　ドクトル・マネット。

男C 　　明日になれば分かる。これ以上は話せない。

男A 　　連れていけ！

男たち、チャールズを引き立てる。暗くなる。

高い場所の脇の小道からプロス、歩いてくる。

酒屋と思しき店を覗く。

プロス　　あまり人が居ないわね。ここにしましよう。

店から出ようとした男が、プロスとすれ違う。

プロス　　ええっ！　ソロモン！　ソロモンじゃないの！

バーサツド　　……姉さん。

プロス　　そうよ、私よ、姉さんよ。まあ、なんだつてそ

んな赤い帽子なんか被つてるの？　ああ、本当に

ソロモンだわ。どんなに心配したか。

バーサツド　止せよ！　ここでキスなんかするな。誰かに見られたらどうするつもりだ！　こっちへ来いよ。

プロスとバーサツド、街灯の下へ移動する。また店の扉が開いて男が出て来る。佇んでいる。

バーサツド　さあ、言いたい事があるなら、言えよ。

プロス　なんて冷たいの。この世に二人きりの兄弟なのに。

バーサツド　どうせ、俺は、ろくでもないんだろ？

プロス　ええ。それは確かに。屋敷はあなたの賭け事で取られてしまつたんですからね。でも、心配していたの。こんな所で会えるなんて。今日は良いことが続くわ。

バーサツド　はあ？　良い事だつて？　ははん、さては、まだ知らないんだ。まあ、いいや。言つておくが

な、俺は姉さん達がパリに居る事は知っていたよ。
俺は役人だからな。

プロス 役人？

バーサツド そう。役人なわけ。外国人が入つて来ると、
名簿が回つて来るんだ。

プロス 外国人？ ソロモン、貴方はイギリス人じやな
いの！

バーサツド いいや、ここでは、俺はチャキチャキのパリ
ジヤンさ。

プロス 何を言つているのか、分からぬ。ソロモン…
..。

バーサツド ソロモンなんて呼ぶな。俺の立場を考えろ

よ！

プロス ジヤ、なんて呼べばいいの？

白い乗馬のコートを着たシドニー、登場。
一人に割つて入りながら。

シドニー バーサツド！ だろう？ 少なくとも、こいつはイギリスでは、ジョン・バーサツドだつた。

プロス (仰天して)えつ？ ええ！ シドニー・カートン様！

シドニー 冷えますねえ。こんばんは、プロスさん。

プロス 今度はシドニー様が……どうして……シドニー様……どうしましょう。

シドニー 驚かせてしまつて。俺もお前が、プロスさんの弟とはたまげたよ。

バーサツド 誰だ、お前は。げつ。まさかチャールズ・ダーネイ……？

シドニー よく似てるだろ？ でも本物のチャールズ・ダーネイがどうなつたか、お前が一番よく知つてるはずだよな。

バーサツド こ、こいつ。姉さんが連れてきたのか！

プロス お知り合いなの？

バーサツド 知らねえよ。

シドニー 俺は知つてゐる。ロンドンの裁判所で会つた時、

お前は、『ジョン・バーサッド』だった。チャールズ・ダーネイをスパイの罪に陥れようとした、検察側のインチキ証人。

プロス なんですって！

シドニー そして今は、コンシェルジュリーの牢番。い

や、スパイ、かな？

バーサッド おいっ！ やめろ、滅多なことを言うんじ
やない！

シドニー 僕は、今日、コンシェルジュリーに行つて來
たんだ。チャールズの裁判を見る為にね。すると、
見覚えのある顔がいて。それで後をつけて、あの
酒場に入った。あんなでかい声で情報を聞き出す
なんて。あれでは自分から「スパイだ」と名乗つ
ているようなものだ。

バーサッド やめろ！ 言い掛りだ。

シドニー なあバーサッド。こんな通りで話すのもなん
だ。それに危険だろ。（大声で）ここにスパイがい
る！

バー サツド （遮る）やめろ!! やめろって!!

シドニー テルソン銀行に行こうか。サンジエルマン通りにある。あそこなら、静かだし、安全だ。

バー サツド 脅すつもりか。

シドニー いいや。今後の方針を話し合えればいいなと思つただけだよ。お前の安全の為に。（大声で）ここにスパイがいる……！

バー サツド （涙声）やめろってば!! ああ、くそつ!!

みんな、姉さんの所為だからな。

シドニー （凄んで）おい。調子に、乗るな。俺がお前の姉さんをこんなに尊敬していなければ、お前なんか、とつぐに首が胴から離れているぞ。この人は、淑女の中の淑女だ。姉さんに感謝するんだな。

プロス （弟を平手打ち）このろくでなし！ カートン

様。昔から弟は、気が弱くて。誘われるまま悪事に手を染めてしまったのです。全く立ち直っていないんですね。あの、それで、弟は何をしでかしたんでしょう？

シドニー　それは、今は言わないことにします。

プロス　貴方は……シドニー様は、きちんとお食事は召し上がるつていらつしやる？

シドニー　（笑つて）そんなこと……心配してくれるなんて。

プロス　いつパリにいらしたんですの？

シドニー　昨日です。ローリーさんの所にはもう、顔を出しました。ただ、プロスさん、僕が来ている事は、マネット家の人に言わないので欲しい。

プロス　何故、ですの？

シドニー　無暗に希望を持たせる事は出来ないもので。さあ、腕をお貸ししなさい。なんて、冷たい手なんですか？　（両手でプロスの手を温める）まず、貴女をお宅の前までお送りします。バーサンド、姉さんの荷物を持て。逃げても無駄だぞ。さあ、行きましょう。

第一幕第六場

サンジエルマン通りのテルソン銀行。パリ支店。

ローリーがシドニーとバーサツドを見て目を丸くしている。

ローリー なんと、まあ。この男が。あの時の、あのイ
ンチキ証人……よりによつてプロスさんの弟だと
は。（大きくため息）チャールズが無罪を勝ち取る
まで、どれ程、マネット先生がご尽力なさつたか。
ルーシー達がどれ程、祈つたか。それが、また監
獄に逆戻りとは。

シドニー （ブランデーを飲み干す）おい、バーサツド。
だんまりは止せ。きちんといきさつを言えよ。

バーサツド 僕は……逮捕される所は見ていない。でも、
逮捕はされたはずだ。仲間がそう言つていたから
な。明日、コンシエルジュリーでまた裁判をやり
直すんだ。

ローリー また裁判だなんて。

シドニー （ブランデーを注ぐ）今、この国では、命な
んてものは何の価値もない。裁判は、生きるか死

ぬかの賭けだ。俺はチャールズに勝つて貰う。だからバーサツド、お前は負けが決まっている。

バーサツド　　ほお。よほど良いカードを持っているんだな。

シドニー　　勿論だとも。だつてお前は一重スペイだろ？

バーサツド　　おいっ！　お前、さつきから何を証拠にスパイだのなんだのと。

シドニー　　証拠？　そんな物、この国の裁判に必要か？

噂があれば十分だ。

ローリー　　銀行家の意見として言えば、まつとうなイギリス人が、パリで牢番になるのはおかしな話です。

シドニー　　牢番は情報が容易く入る。最初、この男はフランスのスパイだった。

ローリー　　そして、イギリスにもこの男を雇っている人物が居ますね。

シドニー　　ええ。首相のウイリアム・ピットでしょうね。

ローリー　　同感ですね。今まで敵対していたイギリスと

フランスが、今度は手を結んで、この革命を潰そ

うとしていますから。イギリスはさぞ、沢山の密
偵を放っているでしょう。

シドニー なあ、バーサツド。ウイリアム・ピットが『人
民の敵』と呼ばれているのは知ってるか？ 首相
が敵なら、お前なんかトカゲの尻尾にもならない。

バーサツド い、言い掛かりだ！

シドニー 牢番の仲間には、本名を名乗っているか？

もし俺が『ソロモン・プロス』と呼んだらどうな
る？

バーサツド そ、それは！

シドニー ほらな？ イギリス人で偽名を使っている。

それを証明する姉さんが居る。これは、いい力
ードだ。

バーサツド どう……どうしようって言うんだ。

シドニー さて、どうしようか。よく考えろ。俺がもう
一杯フランデーを飲む間。（ゆっくり、注いで飲み
干す）さあて。では行くか。お前を差し出して、
代わりにチャールズを解放して貰おう。

ローリー 待つてください、シドニー。この男を革命委員会に突き出せば、プロスさんが……の方は情の深い方だ……どんなに悲しまれるか。

シドニー おつと。そうだ、それだ。俺があの人の弟を殺す事になるんだ。

ローリー あの方はイギリスが誇るべき真心の持ち主。バーサッド あの、有難うございます。姉の事をそんなに思つて下さつて。

ローリー とても苦労なさつたんです。

シドニー ええ。この弟の所為で。

ローリー ならば、いつそ。

シドニー ええ、いつときは辛いでしょう。でも、この先、ずっとこんな弟に苦しめられるなら。

ローリー そうですね。プロスさんも分かつてくれるはず。

バーサッド 待つた！いや、待つて下さい。分かつた

よ！あんた達は俺に何をさせたい？

シドニー お前はコンシェルジュリーの牢番だろ？

バーサツド　　言つておくが脱獄なんて、絶対に出来ない
からな。

シドニー　　そんな事は頼まない。チャールズの家族を危
険に晒すことになる。でも、お前はコンシェルジ
ユリーに自由に出入りが出来る。そういうだろ？

バーサツド　　ああ、出来る。

シドニー　　ならば、俺を一度だけ、中に入ってくれ。
バーサツド　　入れるつて、コンシェルジユリーの中に
か？

シドニー　　ああ。

バーサツド　　それだけでいいのか？

シドニー　　そうだ。

バーサツド　　そうすれば、黙つていてくれるのか。

シドニー　　約束しよう。俺は約束は守る。そつちは？

バーサツド　　俺も約束は守る。

シドニー　　では、もう行つてい。

バーサツド、走り去る。

シドニー 最悪の事態を考えなければなりません。チャーレズがマネット先生の身内だと言う事が全く考慮されずに、再び逮捕された。

ローリー その通りです。楽観はできません。

シドニー 裁判で事が悪い方に傾いたら、奥さんは自ら命を絶つやも知れません。

ローリー なんと！ それは考えていなかつた。

シドニー 奥さんはあらゆることを考えるでしょう。

ローリー 何という気の毒な事だろう……。七十八年も生きて来て、これほど心が苦しい日々はない。七十八ですぞ。この年まで生きると、人生が輪つかのようになつてゐるのが分かります。近頃、しきりと子供の頃を思い出すんです。きっと、私が終点に近づいているからですね。（涙ぐみ）私を抱き上げた母がどんなに美しかったか。どれほど優しい声で私を呼んだか。

シドニー 僕なんかが言う事ではないですが、貴方は立派

な方です。

ローリー 泣かせないで下さい……私はユダヤ人です。

シドニー それは、関係ありますか？ 人の志に。

ローリー シドニー、貴方から『志』なんて言葉を聞くなんて。私は貴方を随分、誤解していました。

シドニー ローリーさんは、父を思い出させる。仕事に誇りを持つていて……俺は、父のような立派な法律家にはなれなかつたんです。

ローリー でも、貴方は若い。これからいくらだつて、やり直せる。

シドニー 僕の体は、そう何年先までもたないでしょう。でも、今は生きています。ここを乗り切るまでは。さあ、ルーシーさんと一緒に居てあげて下さい。門までお送りします。俺は、少しづらついて朝戻つてきます。

ローリー 裁判に行かれますね。

シドニー ええ。傍聴席に居ます。

シドニー、ローリーの肩にコートを掛けたやる。

第一幕第七場

翌日、コンシェルジュリーの法廷。

証言台に立つ、チャールズ。

証人席には、マネット、ローリーに加えルーシー。

ドナルジュ夫妻。（前回の裁判長とは別の声）。

裁判長

（声）シャルル・エヴレモンド。再度、告発を受けたが、それは公式によるものか、それとも密告か？

検事

（声）公式です、裁判長。告発者は三名。サンタントワーヌの愛国者、エルネスト、並びに、その妻のテレーズ・ドナルジュ。そして……医師、アレクサンドル・マネットであります！

マネット　裁判長!! あり得ません！ ただ今の発言は虚偽であります。私は娘婿を告発などしていい！

裁判長　（声）発言を認めない。続けるならば、法廷を侮辱した罪でドクトルを告発する。愛国者ドナルジュ、証人席に。証人とドクトル・マネットの関係を述べよ。

ドナルジュ　凡そ四十年前、私はドクトル・マネットの家で使用人をしていました。彼が牢獄から解放された時は、うちで引き取りました。裁判長、お手元の手紙を新たに証拠として提出します。

裁判長　（声）この手紙は、いつたい誰が書いたものか？

ドナルジュ　ドクトル・マネットです。

マネット　嘘だ！　私は手紙など書いていない。

裁判長　（声）静肅に。ドクトル、下がりなさい。証人はどのようにこの手紙を手に入れたのか？

ドナルジュ　バスチーユ監獄を開放した時です。彼の独房、北の塔百五番の煙突の奥に隠してありました。

マネット　……なんだって！

裁判長　（声）では、手紙を読み上げる。『私の精神が破綻しないうちに、正確に書き留めておかなければなら

ない。一七五七年十二月二十二日の夜の事だ。

回想。高い場所にスポット。若い女性、拘束されて暴れている。その奥に横たわる少年。

裁判長

（声）訪ねて来た二人の紳士に急患だと呼び出され、馬車に乗せられた。二人は名前を一切、名乗らなかつた。しかし二人の背格好や話し声で、この二人が双子だと気が付いた。馬車はパリの北にある大きな屋敷の前に止まつた。すぐに寝室に通されると若い女性が手足を縛られ、力の限り暴れていた。

若い女性

（喰り声）……！

回想のマネット、階段をのぼつてくる。

マネット

いけない！ 窒息してしまう！ （口に押し

込まれた布を取り出す）……貴族のサツシユだ。
『E』の頭文字。縄を解いてやつてよろしいですか？ 一体、これは？

貴族が二人、のんびりやつて来る。

侯爵・弟 何も尋ねるな。

マネット ……むごい事を。拐わかしたのだな。

侯爵・兄 そつちが終わつたら、怪我人を診ろ。

マネット 怪我人？ もう一人いるのですか……!?

侯爵・弟 （足で蹴る）ここだ。もう死んでいるかも知
れぬがな。

裁判長（声） この娘によく似ている。兄弟だろうか。胸
に刺し傷がある。かなり深い。出血が多すぎる。

マネット 君、私は医者だ。目を開けるんだ。剣で刺さ
れたのかい？

少年 ……お医者さん？ 姉さんを診てくれた？

マネット 君の姉さんなんだね。（小声で）名前は？ 君

の名前は何と言うんだ？

少年 ……あいつらが……あの双子の侯爵が……姉さんを嬲り者にしたんだ……。まだ、結婚して半年も経たないのに。義理の兄さんを殺して……。

侯爵・弟 はあ？ あのウスノロが勝手に死んだんだ。

少年 ……本当だよ、お医者さん。体の弱い義兄さんを一晩中、外に立たせて、蛙が鳴かないように足踏みをさせたり、牛の代わりに荷馬車を引かせたり……。義兄さんが死んだ途端、姉さんを攫つていつた。

侯爵・兄 それは貴族の権利なのだ。領地の女は我々の所有物だ。お前こそ剣を持つて乗り込んで来るなど、何のつもりか。卑しい農夫と決闘するなど、我が家名の名折れだ！

少年 ……真つ暗だ……お医者さん、僕を立たせてくれ。

マネット、 体を支えると少年は最後の力を振り絞って立ち上がる。

少年 エヴレモンドの双子の侯爵、よく聞け。お前達の罪は必ず償つて貰う。お前の血筋の最後の一人まで、地獄の炎で焼かれてしまえ。僕の血で呪われた刻印を押してやる！

少年、自分の胸の血を指につけ、二人に十字を切ると、がくんと膝から崩れて、少年はこと切れる。

侯爵・弟 （吐き捨てる）馬鹿め！

侯爵・兄 まあまあ、弟よ。これで一人は片付いた。

女性 ジヤン！ ああジヤン！ （落ちていた剣で喉を突く）……！

マネツト （駆け寄り）なんと言う事を！

侯爵・弟 死んだのか？

マネツト （床に女性を下ろし）首の動脈を切りました。

……もう助かりません。

侯爵・弟 はあ。ドクトル、なんと言う事だ。だから我々

はこの女の手を縛ったのに。

マネット どういう意味でしょう。

侯爵・兄 つまり、この女が死んだのは、ドクトル、君の所為だ。我々は、農奴を助ける為に君を呼んだのに。

マネット しかし、もともと貴方がたが……。

侯爵・弟 (遮る) まあ、いい。君は将来有望な医者だ。この事は黙つていてやろう。ただし、口外すれば、ドクトル、君の身の安全は保障できない。さあ、金貨を受け取れ。

マネット いいえ。受け取れません。それにこの女性は妊娠しています。

侯爵・兄 それが? 我々は今から、またパリに行く。せつかくだから、送つてやろう。

裁判長 (声) しかし、馬車はそのままバスチーユ監獄へと向かった。そして独房に繋がれ、すでに十年の歳月が過ぎた。愛する妻よ。身籠つていた子供は無事に生まれただろうか。私は一度と外に出る事

はないだろう。私は告発する。エヴレモンド侯爵の双子と、その代々の子孫、最後の一人に至るまで、罰を受けよ。全ての罪をその血で贖え。私は告発する、天と地、正義と良心にかけて。一七八八年の最後の日。医師、アレクサンドル・マネット。

静まり返った法廷。

テレーズ 裁判長！ 付け足す事がある。

裁判長 （声）発言を認める。

テレーズ ちゃんと名前があるんだよ、二人とも。攫われた女性の名はシモーヌ、決闘で殺された少年はジヤン。忘れて欲しくないね。私は海辺の街で育つた。でも生まれたのはそこじゃない。私の父さんはエヴレモンドの小作だつた。

ドファルジュ （書類を振り）出生を証明する書類です。

テレーズ エヴレモンドの館に乗り込む前に、兄さんは

私を逃がした。そうさ、シモーヌとジャンは私の兄弟！

熱狂の傍聴席。口々に「死刑！」の叫び声。

裁判長

（声）被告人、シャルル・エヴレモンドを死刑に処す。二十四時間以内に執行せよ。被告人は退廷せよ。

牢番がチャールズの腕を掴む。

ルーシーが駆け寄り、チャールズの胸に飛び込む。

マネットとローリーも駆け寄る。

ルーシー チャールズ！

チャールズ ルーシー、愛しい僕の妻。

マネット チャールズ、許してくれ！ 私は何という事をしてしまったのだろう！

チャールズ 何を仰るのです。これは当然の報いだつた

のです。父や叔父が貴方にした事を思えば。……結婚式の朝、私は貴方に本当の名前を打ち明けた。でも、貴方は赦して下つた。憎いエヴレモンドの僕に耐えて、本当の父のように接して下さつた。感謝しかありません。ルーシー、父上を頼むよ。そして娘を頼んだよ。

チャールズが退廷するのを見届けるルーシー。
ドفالジュー夫妻が退廷しようとする。

マネット　　待て！……エルネスト……ドفالジュー！

ドفالジュー　（振り向かず）なんだつて、フランスに戻つて來たんです。あのままイギリスに居れば良かったのに。

テレーズ　　（につこりと振り向く）奴さんは、ツケを払いに來たのさ。エヴレモンドの仕出かした悪事の数々のすべてを。あんな奴の首一つじやとても足りないけど。

ドナルジュ　悪い事は言わない。先生、とつとトイギ
リスにお帰りなさい。ここは先生がいる場所じゃ
ない。

テレーズ　いいや、まだだね。告発を見届けるまではね。

ルーシーが失神してふらつくのを、シドニーが
傍聴席から飛びだし、抱き上げる。

第一幕第八場

マネットの家。長椅子にルーシーが横たわってい
る。ルル、心配そうに付き添っている。

マネット　……ああ、私の所為なのだ。

シドニー　いいえ。マネット先生、貴方ほど影響力のあ
る方はいません。どうか諦めずに、もう一度働き
かけて下さい。

マネット　そうだ。諦めるわけにはいかない。もう一度、
話をして来よう。

シドニー　俺もいくつか用事を済ませます。そして夜九時にローリーさんの所で落ち合いましょう。

ローリー　では、夜九時に。さあ、先生行きましょう。

ローリーとマネットが去っていく。扉の音。

ルル　シドニーの小父様。ママは大丈夫なの？

シドニー　心配は要らない。ただ眠っているだけだよ。ゆつくり寝かせてあげよう。ルル、大きくなつたねえ。

ルル　パパを助けに来てくれたんでしょう？

シドニー　そうだよ。昔、ルルがまだ生まれる前、ママと約束をしたんだ。プロスさん、景気づけに……。

プロス　生憎、ブランデーは。

シドニー　いや、聖書を読んで下さい。どこでもいい。

俺がきちんと正義の為に働くように。

プロス　まあ。では、この奥様の聖書を……（頁を繰る）

なるべく景気のいい所を……『主は言い給う。わ

れは復活（よみがえり）なり。我是生命（いのち）なり。我を信ずるものは死すとも生きん。凡そ生きて信ずるものは、永久（とこしえ）に死なざるべし。

シドニー 心に沁みる。ルル。ママの手にキスしていいかい？（口づけする）貴女の愛する命の為に……。

第二幕第九場

ドナルジュ酒店の扉が開く。

シドニーがやつて来る。わざとらしく、店の中をきょろきょろ見渡す。

ドナルジュ夫妻とヴァンジャーンスがいる。

シドニー ボ……ボンジュール、マダーム。

テレーズ （近づいてくる）はあ？ 酒場でそんな挨拶はいらないよ。

シドニー ワイン……シルヴプレ。

テレーズ （指さして）ここに座りな。ワインだね？ イ

ギリス人かい？

シドニー ウイ。ジュスイ……ブリタニキ。

テレーズ （カウンターにワインを置く） うちはイギリス人のお客様がたくさん来るんだ。

シドニー ジュグナール、シルヴ・プレ。

テレーズ 新聞かい？ ジヤコバン新聞ならあるよ（新聞を置く）。読めるのかい？

シドニー （新聞を読んでいる振り） メルシー、マダム。

テレーズ ちよいと、ご覧よ。あの客、エヴレモンドにそつくりだよ。

ドナルジュ どれ？ そうか？ あいつの事ばかり考えてるからじゃないか？ そんな事より、お前、なんとかマネット先生だけは見逃してやってくれ。

テレーズ また。情けは禁物だよ。

ドナルジュ 先生をどうやつて告発するんだ？

テレーズ わけないよ。法律では処刑された者に同情すれば同罪なんだよ。旦那がギロチンになれば、あの奥さんは必ず泣く。だろう？ そしたら、娘も泣く。

だったら、先生も泣く。

ドナルジュ　お前、あんな小さい子まで！

ヴァンジャーンス　子供がギロチンに掛けられるなんて、滅多にない事だ。こりやあ、盛り上がるよ。

シドニー　（怒りのあまり立ち上がる）！

テレーズ　おや。どうした？

シドニー　マダーム。シルヴブレ……（コインを出す）。

テレーズ　はいはい、お勘定かい？　お前さん、ワインが少ないよ。裏に行つて、一樽とつて来ておくれ。

シドニーが出て行く。

ドナルジュ、奥に出て行く。

テレーズ　（奥をじつと見る）どうも弱氣でいけないね、

うちの人は。奥さんと娘が死んで、マネットが死んだら、あの人が泣くよ。そしたら、今度はあの人の番だ。

ヴァンジャーンス　え！　姐さん、それじや……。

テレーズ　（笑う）お国の為に死ねるなら、本望だろうよ。

第一場第十場

テルソン銀行、パリ支店。

ローリーとシドニーがマネットを待っている。

ローリー もう、十一時です。マネット先生はどうしたんだろう。話がうまく行つて、長引いているのだろうか。

シドニー そうだといいんですが。

マネット、ふらふらとやつて来る。

ローリー マネット先生！ 遅いので心配していました。

マネット ……（虚ろな目） 靴を仕上げなければ。

ローリー ……え？

シドニー マネット先生？

マネット 靴だ、靴を仕上げなければ！ 私の道具がな

い！ 道具はどこだ！

ローリー ……ああ、なんという事だ！

シドニー どうやら、最悪の事態になつたようですね。

ローリー そのようです。

シドニー ……マネット先生、此処に座つて下さい。

シドニー、マネットのコート脱がせ、落ち着かせるように背中を摩る。腕をとり椅子に座らせようとする。腕を支える手がネットの内ポケットに触れる。

シドニー 先生。（触れながら）ここに何をお持ちですか？

マネット ……（答えない）。

シドニー もしや通行許可証ではありますか？

マネット ……。

シドニー 失礼して、見ていいですか？（内ポケットから紙の束を取り出す）よし、いいぞ。これがあつた。

ローリーさん、俺の計画を聞いて下さい。

ローリー 勿論ですとも。

シドニー 通行許可証がありました。ルーシーとルルの分もある。これがあればパリのゲートを出られます。そして（自分の内ポケットから紙を出す）これが俺の通行許可証。シドニー・カートン、イギリス人。この書類をまとめてローリーさんに預かつて欲しいのです。

ローリー それは勿論、引き受けますが、でも、何故？

シドニー 僕は、チャールズに会つてきます。これをコンシェルジユリーの中に持ち込みたくないのです。ローリーさん、今から言う事を良く聞いて、寸分たがわづ、その通りに実行してくれると約束して下さい。そういうないと、誰ひとり助けられない。

ローリー どんな計画ですか？

シドニー 通行許可証は、取り上げられるまで有効です。

ローリー 取り上げられる？ まさか、ルーシー達に危険が迫っているのですか？

シドニー そうです。ドファルジユはルルまで、毒牙に掛

けるつもりです。本人がそう言つたのです。あのスパイにも確認しました。彼女はマネット家の人のすべてギロチンに掛けるつもりでいます。

ローリー なんと。

シドニー 貴方にかかっているのです。告発があるとすれば、明日以降だ。ギロチンの犠牲者の為に泣くのは重罪です。間違いなく、奥さんはその罪を犯します。

ローリー ええ、間違えないでしよう。

シドニー 一番脚の速い馬を用意してください。一刻も早く、カレーの港に到着できるように。

ローリー ええ。私もフランスでやるべき仕事は終わつたので、一緒に行きましょう。

シドニー いいぞ、ローリーさんが一緒なら、安心だ。明日の二時には、出られるように、中庭に馬車を隠しておいて下さい。

ローリー 分かりました。

シドニー 今から、先生をお宅にお送りして、奥さんを説得してください。ルルの命がかかっているのです、

絶対、承知するはずです。マネット先生も彼女の言うことなら従います。

ローリー シドニー、貴方は？

シドニー 僕が、二時に戻つたら、すぐ出発できるように、馬車に乗り込んでいて下さい。これは何があつても必ず実行してください。絶対に、です。

ローリー 分かりました。なに、私ひとりと言ふわけではない。貴方が一緒なんですから、心強い。

第二場十一場

翌日。高い所、コンシェルジユリーの牢獄。

薄暗い中、チャールズが背を向けて、蠟燭の灯りで手紙を書いている。

鍵が開かれる音、扉が開く。

バーサツドとシドニーが入つて来る。

バーサツド 早いところ済ましちまつて下さいよ。

シドニー 勿論だ。

バー サッド (外に出ようとしながら) 外に居ますから、用事が終わったら呼んで下さいよ。

シドニー 分かってるよ。やあ。チャールズ。

チャールズ 【録音で】 ……シドニー・カートン。なぜ、ここに？ 幻か？

シドニー いやいや。俺は幻じやない。

チャールズ 【録音】 ジヤ、まさか、君も捕まつたのか？

シドニー だつたら笑えるな。

チャールズ 【録音】 君が本当にシドニーなら、この手紙を、妻に届けてくれ。

シドニー では、まず上着を脱げ、ブーツも。クラバットも。俺のブーツを履いて。リボンを貰おう。(チャールズの髪を垂らす) あと、俺の手紙を代筆してくれ。俺の言う通りに書いてくれ。

シドニーとチャールズ、服を交換する。

チャールズ 【録音】 シドニー、どうするつもりだ。ここか

らは逃げられない。そんなことしたら、君も殺される。

シドニー 誰が逃げると言つた？ 奥さんの頼みで來たんだよ。君の洋服を預かって来てほしいと。だから早く着替える。さあ、いいか、書いてくれ。

チャールズ 【録音】宛名は？

シドニー 宛名はいらない、日付もいらない。いいか……もしも貴女が、あの約束を覚えているなら、これを読めばすぐに分かるでしょう……。

チャールズ （書く）……。

シドニー あの約束を今、守ることが出来ました。その事を嬉しく思います。貴女が『自分を責めるようなことがないように……（小瓶とハンカチを出す）私が、自分の言葉を証明できるのは、これしかありません。……書いたか？

チャールズ 【録音】……ああ。何か匂うぞ……。

シドニー、チャールズの口をハンカチで塞ぐ。

チャールズ、ペンを持ったまま昏倒。

シドニー おい。

バーサッド （入つて来る）……本当に約束は守ってくれますね？ 裏切つたりしないね。

シドニー ああ。早く連れて行け。絶対に約束は守る。この手紙を奥さんに渡してくれ。そしたら、お前の役目は終わりだ。

バーサッド、チャールズの肩を担ぎ出て行く。

バーサッド （外に出ながら）……あーあ、奴さん、気を失つちまつたよ。まあ、みんな正気じやいられねえけどどう。

シドニー （見送り）……これでいい。

第一幕第十二場

サンジエルマン通りのテルソン銀行の中庭。

ローリーとルーシー、プロスが待ち構えているところに、バーサッド、チャールズを担いでやつて来る。どさりとチャールズを下ろす。

ローリー やや。どうしました、シドニー（顔を見る）：

…！ これは！

プロス （駆け寄り）シドニー様、しつかり！ えつ！

ソロモン、これは！

バーサッド 奥さんにこの手紙を（渡す）。俺は約束を守つたからな！ （逃げ去る）あばよ！

プロス 待ちなさい、ソロモン！ シドニー様はどこ！

ローリー ……ルーシー、チャールズだ。

ルーシー

（顔を覗き込む）チャールズ！ どういう事？

ローリー

その手紙を見せて下さい。……（読む）もしも

貴女が、あの約束を覚えているなら、これを読めばすぐ分かるでしょう。

プロス あの約束……。

ルーシー まさか……！ あの夏の日の。

ローリー (ハツとして) そうか！ そう言うつもりだつたのか！ 早く、チャールズ、じゃない、このシドニーを馬車に！

プロス そうですとも！ シドニー様を早く！ (ローリーと共にチャールズを支え)。予定通り、私はノートルダム大聖堂の前から、駆馬車に乘ります。カレーの港で落ち合いましょう。

ローリー 分かりました！ さあ、ルーシー、乗つて！

ローリーに担がれチャールズ、ルーシー、退場。高い所の脇から、テレーズとヴァンジヤーンスがやつて来る。

テレーズ 今頃、未亡人ほやほやのイギリス人は泣きの涙に暮れているだろうよ。現場を押さえてやる。

ヴァンジヤーンス 今日の目玉はエヴレモンド！ ザクザクするね。

テレーズ 一番前のいい場所を取つて居ておくれ。あた

しゃ、証拠を押さえてから、急いで行くよ。

ヴァンジャーンス　あいよ、一番前の席！　ああ、楽しみだ。

ヴァンジャーンス、去っていく。

テレーズ、マネットの家へと入つて行く。

プロス、水を張つた洗面器で顔つている。

顔を上げた瞬間、テレーズを鏡の中に見つける。

プロス　（驚いて洗面。器を落とす）……！　な、なに！

（威厳を取り戻し）あら、こんにちは、市民。

テレーズ　あんたにや、用はない。ここにいるのは分かつてるんだ。

プロス　まず、「こんにちは」って仰い。

テレーズ　（声を張り上げ）エヴレモンドの奥さーん！

プロス　出て来な！

プロス　ちょっと貴女、失礼よ。挨拶も出来ないの？　はい、「こんにちは」って言いなさい。

テレーズ

エヴレモンドの妻！ エヴレモンドの娘！

プロス あら、分からぬ人ねえ。まず「こんにちは」つ

て言わなきや。

テレーズ

おや。……おかしいね。人の気配がない。さては、逃げたね？

プロス

「こんにちは」って言つてから、お話ししよう。

お茶でも淹れましようか。

テレーズ

時間稼ぎのつもりかい。

テレーズ、身を翻し、行こうとする。

プロス

（行く手に立ちはだかり）挨拶は大事よ。

テレーズが押しのけるとプロス、飛び掛かる。

テレーズ

放せ！ 放せ！ やい、放せ！

二人、床に転がる。激しいつかみ合い。テレーズ、

マスケット銃を掴む、銃口をプロスが掴む。もみ合つたまま、長椅子の影に転がり込む。

——銃声。

長椅子の影から、テレーズ歩いてくるが、倒れ込む。プロス、よろよろと這い出でくる。

プロス …死んだ？ 私が死んだ？ いいえ、貴女が死んだのね。「ここにちは」は言わずじまいね。（脇腹を押さえ）痛いっ！ あら、耳が変。耳鳴り？…（鏡を見る）腫れてくるわね。（赤いボンネットを被りネットを下ろす）この帽子で良かつた。……急がなきや。

プロス、巾着を持つて出て行く。

第一幕第十三場

パリのゲートと高い所にあるギロチン台。交差する。ゲートには列ができている。

門番 (声) 次！ 通行許可証を見せろ！

プロス (痛みに耐えている)えつ？ 聞こえないわ。何？

フランス語は話せません。生粋のイギリス人ですか
ら。

門番 (プロスの巾着から通行証を出す) 通行証！

ゲートのプロスと高い所のシドニー、影が伸び、
上下で重なる。

シドニー ……イギリス。ろくな人生でもなかつたのに、
懐かしい。もしも、あの人人が、男の子を産んだら、
きっと俺の名前を付ける。そして、その子は法律の
道に進み、素晴らしい功績を遺す。あの人は何度も
「シドニー」と呼んでくれる。そう呼ばれる度、俺
が自分の家名につけた泥が漱がれていく。この国の
この場所がもつと素晴らしいものになつた時、その

子供の孫たちがここを訪れる。……私は復活りなり。
生命なり。

プロス・シドニー (同時に) 我は復活りなり。生命なり。
我を信ずるもの物は死すとも生きん。凡そ生きて我を
信ずる者は、永遠に死なざるべし。

門番 (声) 良し、行け！

門番、プロスを突き飛ばす。

処刑人 (声) 次、シャルル・エヴレモンド！

シドニー、一步進む。ギロチンの刃物が落ちる音。

第二幕第十四場

ロンドン、ソーホーのマネットの居間から玄関。

夏の朝早く。

プロス、杖を突き、荷物を持ち足音を忍ばせてや
つて来る。そのまま、出て行こうとする。

ルーシー、寝間着のまま、追いかけてくる。

ルーシー

プロスさん！ プロスさん！

プロス

（聞こえていない）……。

ルーシー

（回り込んで抱き着く）プロスさん！

プロス

（飛び上がって）驚いた！

ルーシー

ダメよ！ どこに行くつもりなの？

プロス

…：（髪をなでる） 可愛い方。

ルーシー

様子が変だつたもの。気を付けていたのよ。

プロス

なんと？ なんと仰つたんです。

ルーシー

（耳元で） い、か、な、い、で！

プロス

（頭を振り） 聞こえない。まあ、泣いていらっしゃる？

ルーシー

（しがみ付いて） お父様は何も喋らず、一日ぼんやりしているだけ。あの時より、ずっと酷い状態よ。チャールズも毎日、暗い顔。プロスさんまで出て行つたら、私はどうしたらしいの？

プロス

……貴女はもう、立派な大人です。むやみに泣いてはいけませんよ。……チャールズ様が、何も知ら

ないと思つていらつしやるんですか？ あら、 私、
声が大きい？

ルーシー （首を振る） いいえ。

プロス まだ、皆さん、眠つていらつしやいますから。：

：私はね、チャールズ様はあの約束を『存じだと思
いますよ。

ルーシー あの約束……。

プロス 友情の為に、シドニー様が命を捧げたと思ひます
か？ チャールズ様はシドニー様を友人とは思つ
ていらつしやらなかつた。そうでしよう？ そりや
あ、ここに来るときは愛想よくもてなしていました。
けれど、本心はライバルだったのですよ。そのライ
バルは到底、真似のできないやり方で、貴女の心の
一番清らかな場所に收まりました。ええ、きっと今
でも、シドニー様に嫉妬していらつしやる。

ルーシー チャールズが嫉妬？

プロス 貴女の役目はね、ルーシー様。マネット先生のお
世話をする事、チャールズ様を守る事、そしてルル

様を立派に一人前にする事ですよ。貴女はみんなを導く光なんですもの。私は、もう、何の役に立たない。貴女のお荷物になるだけ。

ルーシー 待つて。あばら骨が三本も折れて、耳も聞こえない。それなのにプロスさんはどこへ行くの？

プロス 泣いてはいけませんよ。チャールズ様が存分に生き、貴女も自分の人生を悔いなく生きて行かなれば。

ルーシー (抱きしめる) ずっと一緒に、約束したじゃない。

プロス (思わず身を捩り) 痛い、痛い！

ルーシー あ、ごめんなさい。

プロス まだ。肋骨がビーンとしますよ。

ルル ルル、石板を持って走つて来る。

ルル (石板を示し) プロスさん、行つちやダメ！ 行かないで！

プロス

おやおや。ルル様が起きてしまった。

ルル 大好きよ、プロスさん。

プロス

（ヨタヨタと腰を屈め）ルル様。ローリー様がいつも言っている「人生は輪つか」と言うのも、こうして見ると領けますよ。私も、輪つかの最初に戻つていくのでしょうかね。（ルルを見つめ）昔、あなたによく似た少女と出会いました……幸せだった。

（ヨタヨタと立ち上がる）今は、シドニー様の為に祈りたいのです。誰をも憚ることなく。そうして、私の心に、またあの方が戻つて来る日を、静かに待つてみたい。

ルル

（言葉を書いて石板を示す）プロスさん。

プロス

（読んで笑う）まあ。おませさん。でも。その通りです。私に白百合の花束を渡して下さった、あの時から……さあ、私の大切なお嬢様方、神様の祝福がありますように。さようなら。

プロス、ゆっくり歩き、扉を開け、出て行く。

ルーシー ルル、なんて書いたの？（読む）「彼を愛している？」。愛している……そうなの？ プロスさん。

ルーシー、プロスが去った方を見つめ、ルルを抱き締める。

幕